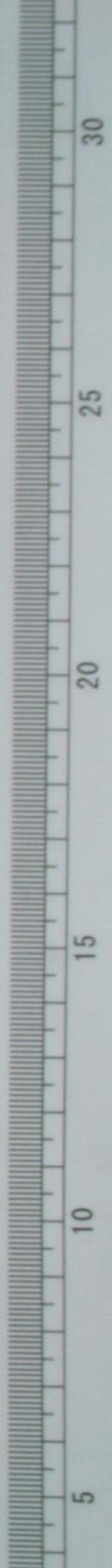


甲戌頌錄

六

昭和九年八月中浣起筆

特別
14
1919
461





176726

甲戌瑣録

昭和九年八月中浣起筆



○身切人の身と活次と兒の心境のちと云ふ話も
出で終つた。こゝまで身分もさういふくのは話を陳べた。
客も多し後、聞え佐かたを追考をも漫くも書き
つくと、此とちと云ふ程の階級もあつて、一概にいふ
心難い。女の心境は月さくさくの解脫をまじき。その
こゝも云へる。そのあふ。後著する。身おに何人の係累も
るい。身も任もさけん。功名心もさる。之んを僧侶と較
べて見れば、どうであらうか。僧侶も四布施を受け
て生活してゐる。獸は乞食と変りかゝる。係し僧侶

功名心もまた責任もあつて、身の方の徳であつて
七、決して身軽くしてゐる。世禄をやつてゐる無何有卿
入るよりの客もあつてゐる。唯此の僧が身外に何よも
ないよりの客もあつてゐる。唯此の僧が身外に何よも
世の時より上人の坊主と云ふ人だ。あんな名門の出かから
里に在つて、いふまでもない。あつてゐる人あつての客
を拂つたか、か四つ助、重の境遇であつて、或んとも
と違ふ所が、さういふと、悲愴せん、徳を其心
境の解脱の境であつて、あつてゐる。高僧をいふよ
ハ自然人の帰依もあつて、教もあつてゐる。あつてゐる
九七解か、心境さう得るよりの客もあつてゐる。況んや
身を墨の衣も包めよ、野卑さう、俗僧も在つて、ハ



布施をさすけ、教もあつて、手次に似てゐる、手鏡の心境
の及ぶよりのよりの境も是れである。
其徳枕のわち、乞食や、施の縁を掲げても、ことさ
ハ神像をいふ、さういふ、神像と思つて、下さう、さうい
ハと、あつて、和方の解脱の心境を、見ることが出来
乞食、身元と佛法感化を、受け、さういふ、却つて、其
の心境、僧侶も、清浄さう、さういふ、必竟、其境も
から、さういふ、自然の一致と云ふ、さういふ、境も
さういふ、種々の原因、様さういふ、一家の不幸や、自家の懶
惰や、その本を、尋ね、其、事、さういふ、起つてゐる
の、此の境、さういふ、ハ、必竟、一七、瓜熟、白癩の
やうな、類は、さういふ、やうな、法、さういふ、達し、此、果

七ある。身と放蕩が持ち崩し^れ世間道もある。決して愚昧の
こぼれ^らと思つてゐる。御里茶が画も押巻をしてゐるの
を言ふと偷みえり、其意に感心し、日を約して喫茶に里茶
を招待し、山中の柿園に誘ひ、器物一式を調ひ、乞兒を遊ばせ
せ、其意に感ずる里茶をして心動かぬ自ら御茶を煮くし、の
れ、話るゝ乞兒も凡所のさうあつた事だと話さるゝの
ある。乞兒は、何れか歌をよみ、まゝあつた、御酒の淋し
さを傳へ、常々人形を憶ち、て飲食の時、まゝ人形
を打手^らと、此も念のあること、時人伝に、収まると、古
賀、其しが、遊ばせると、多ければ、時、子孫が、此に、居るゝの
ら、社会、向ひ、百方、往來、して、見ると、乞兒の、群は、西院の
子孫の、あつた、こと、と、多るゝ、こと、事、定む、と、ええ、をやつと

御酒の淋し

救ひ出し、或る、少るゝ、邊、空、念、させ、れ、其、家、が、断絶、し
て、再、い、と、叱、辭、し、疾、の、れ、話、し、一、年、決、再、ら、木、三、公、を
と、奉、末、の、速、捕、を、遊、け、ん、と、一、時、丹、波、の、山、中、に、隠、ん
て、乞、兒、と、同、様、と、時、々、出、る、未、だ、踊、り、を、演、
じ、て、花、柳、の、巷、に、念、と、ら、ん、た、こと、も、あ、る、自、分、の、知、り、
み、酒、飲、み、乞、兒、は、佛、蘭、西、茶、あ、る、中、島、基、が、自、分、
の、若、い、時、に、志、を、く、酒、錢、を、貰、ら、れ、来、た、こと、も、あ、る、木、三、
の、偽、装、が、あ、る、が、中、島、の、偽、装、が、さ、う、と、酒、を、身、を、亡、し、
誘、ふ、三、日、乞、兒、を、ま、ん、が、其、味、の、馬、の、難、い、と、言、ふ、ま、ん、が、
暢、氣、の、さ、う、と、見、る、或、る、乞、兒、の、路、頭、に、寝、て、み、る、の、を
言、ん、が、家、を、押、し、来、り、一、箇、園、の、上、に、寝、か、せ、て、見、る、と、
ま、ん、が、病、屋、に、住、む、と、な、り、適、げ、出、し、話、し、あ、る、彼、等、の

注書する、是れ加事定むあるは、其家にもあつたの礼金を出
すのむ、此乞兒の収入があつた。四葉帳面を差す。さう
相布月日七行を相布面倒せあるのむ、是れ他人の徳さ
ハチのくぬ。母便も次さ外はと云ふが、此等ハ頭腦のさ
乞兒のうゝ比業がある。

を合とまゝとる哀なる境も見え入るが、さういふさうの祝
詞で其境は是れさうの哀れも思つてあるさういふが、
憐れと云ふさうのめさういふ、彼等ハ百年の昔のさういふ
却つて憐れんがゐるが、此れさういふ。さういふさういふ不自由
かゝるさういふさういふ人間も、怒のさういふ二〇六時中
役々ハ世のあゝ息を得るさういふさういふ。と云ふさういふ
さういふ憐れんさういふさういふ。彼等ハ、
不毛の世に世を憐れんが
さういふさういふさういふ



の物。盗まぬ。喧嘩もせず。研事もせず。金を得んが
おれぬ。酒も飲まぬ。酒も得ることこそ王冠
を得るさういふさういふ。自然の金生活もさういふさういふ
と。其もさういふさういふ。偽りのある。偽りもさういふ
天竺の深鏡。自かくも他も欺かざる。乞兒のむか
いくさういふさういふ。八月十七日。記
○若侯の晩酌の例として、冷花座の氷塊をぶ
つ割つて、自玻璃盤に入ら、金身には、さういふ、さういふ
さういふ涼味を添くさういふさういふ。一ソフト氷塊をさ
感し比。さういふの、涼味を添くさういふさういふ。氷
山を締め、坐間、之んを玩ぶ趣があるさういふさういふ

無難なるの敵き割つた氷塊ハ盤中の錯綜し或は
く或は低く高きと云ふ山の頂の如く峻く峻くと云ふ山に立つて
軟心形をもちぬ處に西洋ある山の嶺の趣の如くあり。殊に氷
塊の割れたエツジに青板鋭尖が青板の現れん觸らんが
指も断え趣のあるは、自然の山をつくりて實際の山を
ふかひんる危険を感せしむるはあらうかと思はせり。低
い氷塊も小峯と云ふものがあるも、そんなが相連する
状ハ自然山の如くあり、冷谿谷と云ふものもあるが氷
瀑布と云ふべきもの、溪谷と云ふべきものもあるが氷
河のせきと云ふ拊石の絶對と云ふ。自分ハ氷河の流の
任験の如く、こんと見せ種々の想像を馳せ、氷塊の位
地を變する種々の景が去来と考へ、試みよ深い

雪嶺

大ききエツジの氷塊を移し、小なるものよりエツジの
つめこみ、遂にエツジの頂點に大なる氷塊を載せし見
ると、氷盤中の景を全く變じ、頂點の氷塊ハ天を摩す
この概がある、こんと人間に登攀しと許さるると思
はる、エツジを覗いて見ると、氷塊ハ折れさるつて、其
中ハ洞際を見がた、そこハ攀する時の路もあつたのであ
らう、その洞際を縫つて行くと、思ふと、戦栗を林か
得るの危険がある。四五分経て頂點の氷塊ハ漸やく
解けて、エツジの中は、落下する時の影を、見るべき地
景、こも雪山の影、こも、大地の氷山で、此のナダシがある
と、こも天地を震撼するものがある。そんな想像
すると、偉人戦へると得る。そんな既に先づ山嶺登

禁ずるを企及する能くも別と氷河を度するのありし
 然るも山嶽を好むこと依然と酒と目的又るも
 氷山嶽と魂を飛す一興とすすとせしが酒と氷嶽
 七赤毛の一笑と己の時昭和甲戌夏月十七日也
 翌朝筆を走せし記す
 の日本酒の輸出、殊に雑貨の輸出、著しい事実が、西洋諸
 国及び他島の輸出、且つ價の廉さるる、産額と、関税を
 引上げて増きまてゐるが、今朝の都心の形も左の記す
 か又く、このハ、輸出の多き、今朝の都心の形も左の記す
 折角注文が来ても、道を適かすことが、日本の病も云ふ
 べき、藝術家が飽き、藝術の衰へ、物を丁合する心
 えとするから、到底大量生産が出来ない、こんな打

輸出貿易の新進花形 余りに藝術的な 名人氣質が仇

『輸出景氣時代』が生んだ一點景

大分華々しい話がついに、いよいよやかな物語を、輸出時代の
 の動向に御覧に入れる。たゞし書
 き出しは大げさだ、こゝろナチ
 スがドイツの政權を握り、世界の
 耳目を驚動せしめたユダヤ人迫害
 をやつたことに、事は端を築する

『この通りのフランス立を』
 ス作つてみてくれ』とい、
 で早速やつてみると、な
 帳がよくて、折返しブラ
 今までイタリから米國
 るた人形をつけたネクタ
 せて二千ダースの注文が

由來北陸といふところは、佛教
 殊に真宗の盛んな土地である、
 法主遍鑑の像には、その浴した
 風呂の湯を善男善女が、有難涙
 にむせびながら、呑むといふ話
 さへあるから、それと關係
 があるかどうかわらないが長閑
 は名だたる佛壇の産地で、その

田島 三
 田島 三
 田島 三



品彫木

夏
 出畫印
 第一
 第二
 第三

田島 三
 田島 三
 田島 三

樊子曰と合及する能く、引と氷河を度するのありし
 然れども山嶽を好むこと依然り、酒と田圃又も
 氷嶽と魂を飛すか一與らざるをせし、酒と氷嶽
 も亦も一一笑に已む、時昭和甲戌夏月十七日也
 聖朝筆、を走せし記す、

の日本西の輸出、珠、雜貨の輸出、著しい事実は、西洋諸
 心見りおの心の特約、且つ價の廉き、廢倒せん、國稅を
 引上げて廢さしてゐる、今朝の朝の、左の記す
 へて、このハ、輸出の、時時代の一點、あるが
 折中注文が来ても、を適かすことが、日本の病もよ
 べき、藝術家が飽き、藝術氣、物をて、心
 えと、から、到る大量、去来、い、こんと

標記

輸出貿易の新進花形



余りに藝術的な

名人氣質が仇

品彫木

『輸出景氣時代』が生んだ一點景

しい話がつづいたから、輸出時代
 かな物語を、輸出時代
 に入れる、たゞし書
 けた、こゝろ、ナチ
 の政權を、世界の
 したユダヤ人迫害
 事、事は、後長岡の木彫細工

ドイツへの注文を断るといふ、
 去年の春のことだ、そこでドイツ
 品の代りに、安くて恰好な日本の
 ものを賣はうといふので、權澤の
 さる米國商館が、さかしく、さ
 た場合、白羽の矢が立つたのは、越
 後長岡の木彫細工

由來北陸といふところは、佛教
 殊に圓宗の盛んな土地である、
 法主巡錫の際には、その浴した
 風呂の湯を善男善女が、有難涙
 にむせびながら、呑むといふ話
 さへあるから、それと關係
 があるかどうかわからないが、長岡
 は名だたる佛壇の産地で、その

彫刻をある木彫師が澤山ある、
 この連中が、佛壇の彫刻だけで
 は食へないといふので、惠美須
 大黒の置物を彫つたり、洋傘の
 柄の獅子の頭を彫つたり、いろ
 々な木彫を作るところから、
 こん注文があつたわけだ、

ドイツ製品の見本を送つて来て
 「この通りのフランシ立を二百ター
 ス作つてみてくれ」といふ話なの
 で早速やつてみると、なか／＼評
 判がよくて、折返しフランシ立と、
 今までイタリから米國へ出して
 る人形をつけたネクタイ掛と合
 せて二千ターズの注文が来た、喜

んたのは土地の木彫家連中、六十
 人ばかりで輸出木彫組合といふの
 を作つて先づ形式を整へ、市役所
 も承認して、景氣は木彫からとい
 ふ意氣込み、變つたところは、
 ジャズに便な木魚百ターズなん
 ていふ注文も入つた

と
 るが喜んでほみたもの、
 考へてみると間接に合は
 ない、大體がこの木彫家
 連中といふのが名人氣質がある、
 刀をとつて木を彫る仕事だ、アン
 チモニーの鉛筆削りを型で作るの



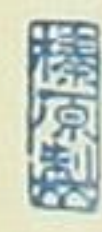
とは仕事の種類が違ふ、いくら外
 國の品物を真似して彫るとはいへ
 一個々々の出来栄に、藝術的な
 苦心もあり、満足を見出さうとす
 る努力もあるわけだ、従つて、さ
 うバタ／＼と澤山にはひねり出せ
 ない、フランシ立が一つ四十五錢、
 ネットイ掛が廿五錢、木魚が八十
 錢といふ値段では、材料の木を買
 ひ、彫つてから裝飾に塗らせる手
 間を拂つたら、差引いくらの儲け
 にもならないとこぼす、ところが
 日本の物となれば何でもかんでも
 安く出来ると思ひ込んでゐる商館
 の方では、もつと値切り倒さうと
 する、こゝに先づ儲けがあつた、

安いの注文がウンとふえれ
 ば忍べるとして、もつと困つた
 ことに注文がバツタリやんで
 しまつた、百方手をつくして商
 館に立つてゐるうちに、この
 木彫屋のことが評判になつて、
 土地の新聞で紹介された、する
 と怒つたのがその商館「折角見
 つけた商賣物がよそに洩れて、
 ほかの商館が別に作らせ、向ふ
 へ一日早く賣込んだら、こつち
 はもう商賣にならん、けしから
 ん」とカン／＼になつて木彫組
 合に怒鳴り込み、すつかりお寇

今こんな状態にあるこの木彫
 輸出が、將來果してどの程度に發
 展するかはわからない、品物がど
 つちかといへば美術工藝品に屬す
 るのだから、値段第一の輸出から
 内地向きに轉向する手もあること
 けれど、輸出時代の人情の然らし
 めるところか、どうしても輸出に
 執著してゐる、とにかくはかに外
 國へ進出する術もなく、商館にお
 どかさらいひなり放題になつて小
 さくちよまつてゐる、かういふ輸
 出景氣時代の一點景もあるのだ、

ラフ彫木は眞寫
本見のて立シ

うが老の如く優しく情味のこぼれに奥附が自今好ま
 我等かたが本道ちかひをく守るも進一と
 此が口徳とこそのみあつたか—ききもろく—
 たゞ人の心を慰むと秘傳といひ—
 ふ—付の作名と文句のはれ名がたふすこを
 秘事のまのげとや か—
 竹本義太夫〇口
 近松門左衛門
 山本九兵衛板口
 通例の奥附の事秘的の免状式があるが流石に元禄頃の書き
 方の優美がある、秘事—まのげとや、か—く—まのけりるも
 の名文句と艶籠を競ふ故がある。



○このデパートでも一日平常人ほどの客が無人で行きまはぬ程
 のデパートは秘傳の術をも選ぶがゆゑに三四のデパー
 トは地下鐵と連絡を保ち地下鐵の乗客の容易なデパー
 トに入り得るやうに—此の各デパートは商業志
 の奥附の起るも今いづれか—ト次各デパートは無料
 バスを以つてステーションの客を毎日送迎してはるも客引
 である。終日電車や地下鐵の停車場とデパートが同
 一屋下と爲る設備をもち—あるは、決意の秘傳をも
 ハ即ちその秘傳が、電車を降りることを送迎のデパートへ
 行くまでもなくステーション附のデパートと就て用を兼
 するこゝが出来ぬ、ハ其の趣は便利のちいさな秘傳
 此のターミナルの二風を大坂の改急がその秘傳といふ

々此の風がある。行いんとしてぬる。大改が成る。風は此の
其任量ある。てふ。不と信する。東京のデパートの考すこと。バズ
客を引く。一。学程の倦。よとや。つ。客の買つた。物と。物
やつ。り。さ。る。禁。用。の。お。よ。よ。一。田。の。も。十。銭。の。か。ら。動。を。い。あ。る。然
ふ。さ。る。面。倒。る。客。引。派。と。腐。心。さ。る。も。も。品。物。と。割。減。し。て
送。迎。さ。る。客。の。停。車。場。で。先。を。買。入。る。客。も。一。般。客。の。集
ま。る。こ。ろ。は。新。界。か。ら。起。つ。た。と。言。わ。れ。る。果。し。て。此。酒。を。あ。る
言。ふ。こ。ろ。は。信。が。一。割。減。の。か。ら。か。定。地。の。も。の。切。り。さ。る
が。免。こ。る。商。合。理。的。の。風。を。云。ふ。べ。き。と。あ。ら。う。

今日デパート萬能の何れも亦も一時の客を合するを以て
程な酒を用いず合量も四割は今の酒を用いて互
流る料理が味もやうなまらぬ。今の料理もついで



パート七出来れ。客を業地けりさる。出来る。が。こ。ろ。に
他日の出来も切らる。淡者の松名七階全体が望を
の。お。減。は。さ。る。も。も。一。階。に。地。下。街。と。連。結。さ。る。デ。パ
ト。の。も。車。の。上。の。一。階。が。分。園。に。み。た。猶。洋。場。と。も。さ
つ。た。利。店。と。ん。も。も。展。も。さ。る。か。後。志。誰。の。榮。か。あ
る。

の自合の酒を味あからさる。酒を飲むことを藝術と
心得る。他は酒を飲ぶ術をいして。自合の友人。豪酒家
か。あ。つ。も。の。人。が。客。任。と。得。に。時。何。ん。と。さ。る。は。か。と。ん。果。か。酒。を。飲
め。さ。ら。ふ。里。に。さ。る。自。合。の。女。親。如。今。に。其。非。を。鳴。ら。し。て。こ
か。も。酒。を。愛。す。し。と。あ。ら。う。け。ん。の。侍。士。と。さ。る。り。得。ぬ。と。自。合
の。持。論。と。さ。る。か。自。合。の。飲。み。道。と。さ。る。と。見。く。も。さ。る。侍。士。と。さ

の骨

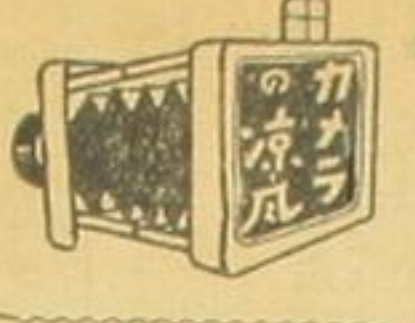
坪内逍遙博士は一時重態を傳へられたが、もう九分通り回復して、熱海の別荘で静養に専念してゐる。白鷺達々として七十六歳の老翁、病後の跡は目遣せ



どうです……私には至なし師なし、次に、始めて腰傷すべく全裸となつて鏡を見た時の狂歌——
骸骨と異るは只皮一重

つてゐる。世の世の人の愛方分の刊行物三冊を寄
せるとき、まを紙淵も忽ち有名なる偽者も、靴のり
文をかえりて。まのサナザの甚く志を執るある
自分もうて此偽者、興味を倍ちる時、今もいふ
前、(難ねと書いたことあるが、今も島田謙二とあ
の考の、原書と引いて大分書き直さぬ。此方
あつて、心も偽者の前、あつた時、空もあや航海師
が、世の世の世の世の世の世の世の世の世の世の世
しあつた。と、あつた。と、あつた。と、あつた。と、あ
しあつた。と、あつた。と、あつた。と、あつた。と、あ
しあつた。と、あつた。と、あつた。と、あつた。と、あ

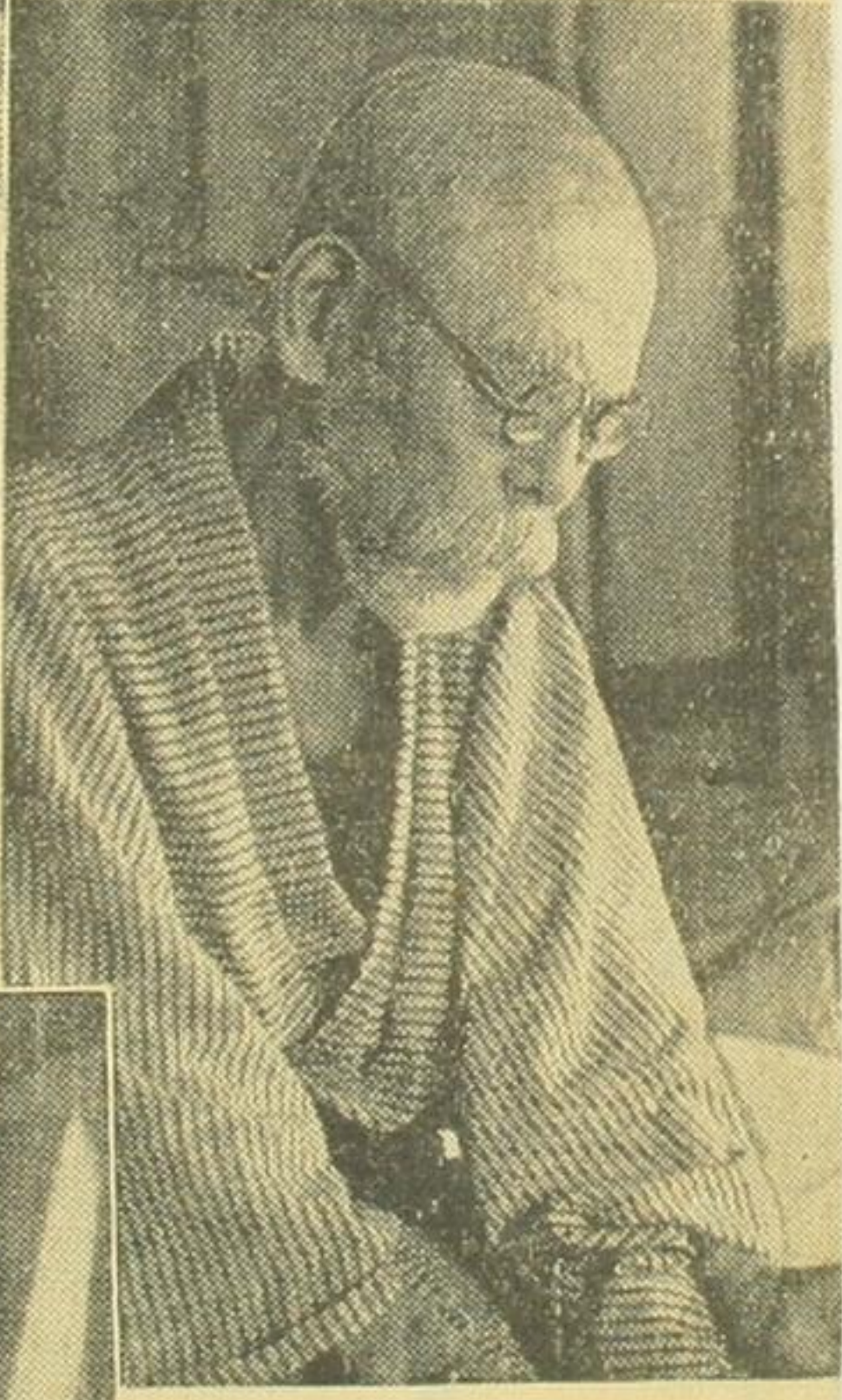
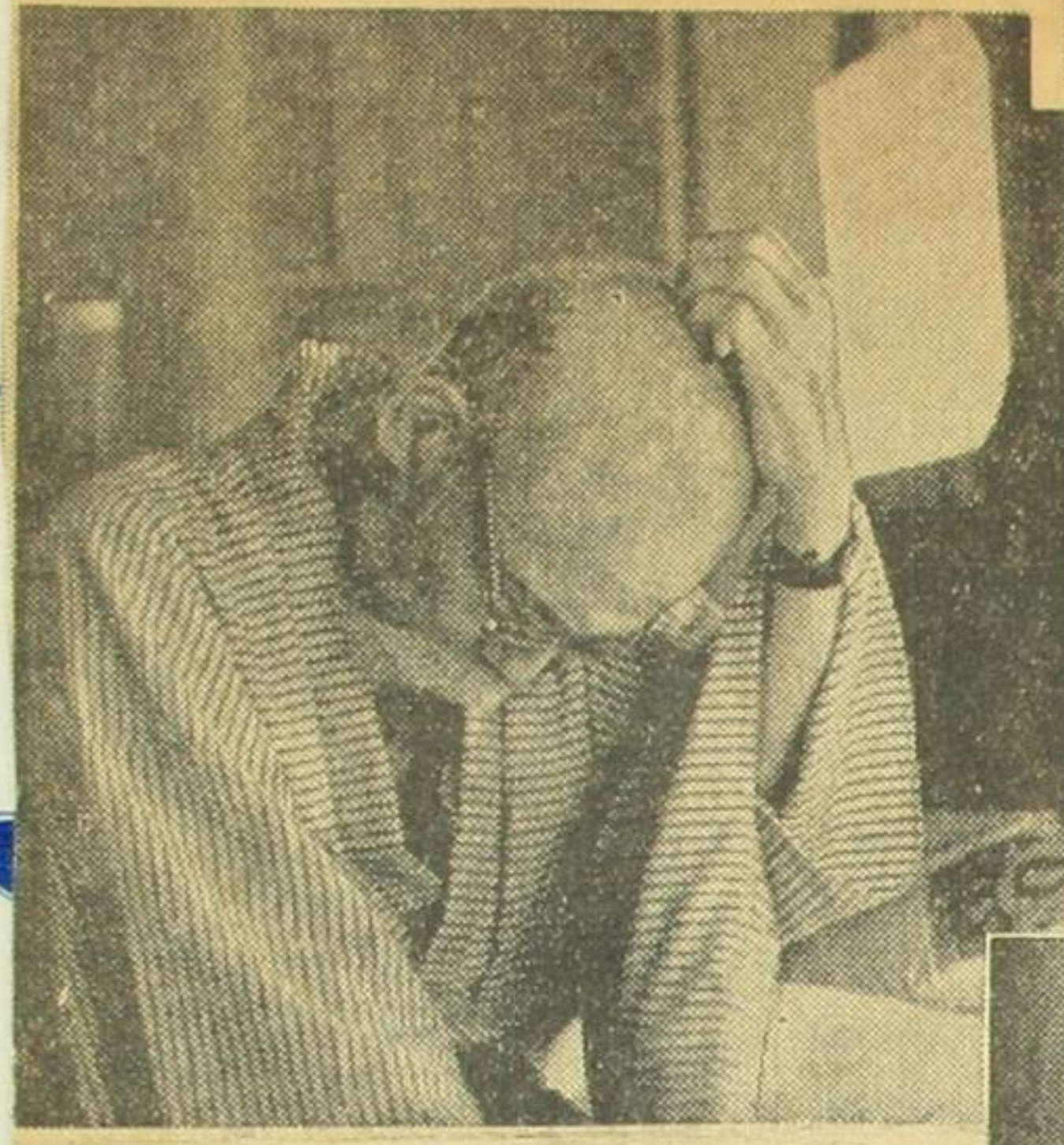
し涼は身のみ



士博遙道

名刺子
博士 えー私の肺炎は、出来もわるいが、なんとも早く治らぬ肺炎で、醫者も、あなたの肺炎はよほど風変わりだ

ねがなく、元氣、日茶飯を嗜つても酒々脱々として本讀みを飽くやうなと驚いてゐる始末……
「先生はこの家屋敷も、印税も、演劇博物館に御寄付なると御遺言済みとの事です」



太つ脱ぎへ腰と細りて
ハハ、ハハ、厄徳と稱して——
みな人の堪へがてにすなる無き日も
骨のみの身には涼しかりけり……
も一つ——
死面にはこの顔もぢやこそ興あらめ……
ノッペリしたデスマスクくらの面白くないものはないハハ、ハハ、
と自分のデスマスクの出来迄まで今から興がつてゐる逍遙だ、欄間の顔に「遊於塵」とあるのも、我の心算を語つてゐる

博士 えーえ、さやう全部、それですから何時死んでも平氣、たゞ家の婆さんの食扶持さへ残してやればね
アツサリしたものだ、全く「市ヶ谷別荘」の恋張屋さんに聴かせたくなる
博士 爲さむことの未だあれこそこの命生きむとも思へ惜しげくもなし……
これが高熱中の實感です……どうですか？
この位でいゝかね、五百字位？ それでは少し足りないだらう、えーと……
と胸身になつて心配してくれるから、私で苦勞した人は有難い
博士 では、これは別冊だが——
秋立ちぬこの稱せを寫眞に撮らせばやも一つ——
秋風や寸ほど伸びし頭の髪



の著書、ロビンソン、リッパーを出し、十五年前に由この著書
志を出し、とある。森、デプラーの「荷印の浮城」の著書
がこれと同一の著書なり。この著書も真実を極ふれ、よむ
ある。此著書の「浮城」の文字と著書力とを有つておれ、とて
七、管の一、此の著書に、この著書は、何時か著書とて、
「この著書は、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
この著書は、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
人々を推しておれ、とて、この著書は、何時か著書とて、
此の著書は、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
目もさし、日本書と稱して、何時か著書とて、
も、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
他、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、

浮城

交、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
目もさし、日本書と稱して、何時か著書とて、
の天一坊、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
も、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
と、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
の、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
の、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
記して、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
回、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
か、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、
積、何時か著書に、この著書は、何時か著書とて、

○近頃の雑誌に准るゝ氣のつくりの伏字の多いことである。其れは
かたはるゝもさしから別して伏字が多くなるて来た。或る場合は
どうも二三行も伏字をもちしめる所がある。其れは別種の多い根
拠を懐くやうな電も伏字がある。いくら流行もするて人
の注意を惹くため伏字をよゝむのゆゑに電をこゝせり伏
字をいへる者の想像をそゝるやうにする。然しあるやうに
かじめ讀者に伏字の記号のキ―をやりて置くてするキ―を念にせ
て讀ませぬこともある。例へば例へば△×と記号が依るの何ん
とあるとまゝに伏字の記号の内々凡例式にキ―を添へて讀者に配つこ
うにする。或の敷字を伏字の代りて置くてんせし程の
誤解もある。正誤表をいふも誤るゝ所がある。大抵の
誤植をやりて置くて其の意味を正誤表に示すのがあつた。

の志はとも危険な文字があつた。根拠の文字があつたりす
る。正誤表もつくりする。誤るゝゆゑに角をいふ文字界の
いふ誤り。伏字の多いの或ると藝術をとりてあつた。若し他
日キ―が別けたとせんか。其のつまらぬ又とらうりつた。あつた
出版法も追つて伏字を禁するやうな個條の追加せんが
ふゝぬと思ふ。

○箱の無物もきつ一法して日本偽者考の勝字を始めて
六日筆を起し廿二のて畢る。百枚計りのものもあつた。何字
の書き入るゝ夫眼のうらさきこも也。夫に角字一果せり
ハヤの勝字の未竟とせん一徹してのすべき。數余壯年のに
あつて勝字を試みんとせん。未だ他人の書を書きし。一昨中
田中吉山伯自字の古筆題跋見ぬ。百枚計りを書し

勝字一筆つて後其偽を切つて悔へ此人の例もある、古
若葉集の序を偽するものかと考ひ、又を萬葉の
首端に「豆」後ニ其偽撰を覺つて愧ぢた例もある。
偽考●「うら」葉つ可らるるものもある、前こらふ序
や奥書が偽かあつたもの、他が西書にあらぬもの、
へきむらへ。又甲陽軍鑑の如き、疑ふ誤謬が多い
けれども、戦国時代の状況を知らぬと相中便値のあ
らざるべからず、取捨し用ひたるとせんし、此類の
もの化すものもある。大体竊入が偽ともするもの
もあるから、まんとを除外せん後、その道理だが、それを
天除くこと、事實である。

● 偽書ともいふ和歌集を、萬葉や古今を、かゝる後

み人の心えさういふと、取つて或の人丸や、あ人の集
と云ふ、一とせむの通つてあるものか、いふものもある、
後の人が心えさういふ、かゝる類ある、
三十一人家集を、名高わい、よれが、
偽ら怪しい、いふ、古の、杜撰の、
本に、美術的、
つと、
和歌の集に、
本と古葉の、
願、
か、
し、

一 偽書の内、その極めを稀にせしめ、支那心の佛書と日本僧の書
へいせふふくしきとある、是れは十王位である、これらも日
本の佛説である、開度癡の書も、目書ありあり、まづの
考証家の全部日本僧の手、成るは偽書とせしむるも古
今妖魅考の支那人の撰、心づかぬ、然して日本僧の
宗入るる、この説は、何を以て判れせしむるも
支那心を日本化し、そのまじりも限らず、稀にの例
として、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

一 書名を種々、更改して、刻して、同書或は刊年を偽書
刻して、歎徳川幼く、多し、近年、複製物、術大の、
進み、無頭、の、書、去、法、字、版、に、有、頭、本、の、版、を、撰、
刻して、人も、の、類、く、もの、あり、師、直、の、首、撰、任、の、版、を、

他、并、撰、刻、して、他、本、に、附、し、る、もの、あり、此、從、現、こ、一
説、し、る、もの、あり、以、今、巧、み、複製、物、を、し、る、本、を、百、年、の、後、
人、之、れ、を、見、か、或、は、正、本、と、す、ま、あ、る、歎、徳、川、幼、く、時、代、を、
ん、ん、或、ん、ん、の、複製、物、と、す、ま、あ、る、得、て、る、もの、あり、
く、撰、て、ん、ん、と、は、り、。

一 最後、に、附、し、て、ん、ん、の、甚、き、漢、書、を、著、す、る、書、集、に、
せ、し、る、を、撰、出、し、て、撰、出、し、る、築、室、の、偽、書、を、し、る、もの、あり、
本、書、に、撰、出、し、る、もの、あり、

○大坂の森重夫、も、撰、出、し、る、書、集、に、撰、出、し、る、もの、あり、
り、る、後、に、中、に、左、の、記、を、し、る、もの、あり、
或、る、者、香、坡、ハ、杉、本、奎、平、の、三、人、(他、の、二、人、ハ、杉、本、教、山、也、)

唐の()と通へて文字の意を伝せし三人の其酒の
味芳烈なるを嘗みけんが死るゝ之を賞せしは香波
の忽ち夏よりき雨ももて三人に向ひたる丹後()
録と銘するもあらずが波の天下に有名なる伊丹も
近衛公の欽地を僕帯て其地方の學校を教授す
一塔を造りて()此酒()の()
也()抑も()
帝()の()
相()
船()
市()
或()

相伴の段に侍りけるところ、世御と進ある酒の味若く
且の遠くして公の口より叶ぬものも無き事
公も清流を包み退れり、其聖の欽地より入り
室の也をかしき一樽を献とて及びけり、主上の其故
近衛公に勅せしける按る、朕の酒を味て者
用ゆるんが下司らるる近衛者皆前夜の如き茶
品もが今卿が献とする所の酒の味もさきこと遠か
に飲つて是るんとりたまはらけんや近衛公らるる
且の要ぬ且のいふ夫も年々伊丹の酒家へ申
付けんと候しめ公も献とて及いりも例とする
此花保のこととすしとすきと三人の智る齋し今又
如のぬ悪くも是命吏の奉勅かるとも果の大音と

寫りつゝまわし勤王の精神を振ひ起しけりといふ
此年ひあつたか山陽の如作は先比の書状(其字の載を
旅中の中にもある)ハ一とて酒のすゝめ聞してゐたか其
又伊丹の酒の近衛家と受つてゐるか傳りてゐるか
つ比、其の時、近衛公の飲地は伊丹であることゝ氣附
ず、いづれに近衛家と伊丹の酒があることと思つておれ
北江も七始の理解が出来た。山陽の丹波もあ
り、飲まぬものゝあつた。近衛公が氣附
す、丹波を清承といふやうな仕立てとせし
〇聞て来して香波の邊におとされ、二、三折れ

衣投浦上農家

某床席與衾結夢難 夏宵終竟客衣寒 紙窓全破
天光入我個星臥枕上眉

長崎

稽如眼鏡海如臺 切石敷街板極長 暮霞山嶽三三
争變氣秋深六六 五時光朱門映村支那奇彩
記飄雲雲圓橋 目送江毛還 辨於此 乍疑身是
左珠方

勿去山

君不見東方勿去山 凡沙冰雪易彫顏 又不見西方
真樂土 朱欄縹緲五重閣 鏡影紅絳 能留客
翠峯黛 鳩然勿去山

贈木下逸雲

逸雲詩人色日田
留連不還鄉

水谷山麓入看長人雅地靈詩畫者解得美云
忘故土念和淡與不離鄉

云邨

四山如舞以邦原步一方如遠市門黃髮盡收分細極
徑跡陰全滿失和村鼓喉蛙子野沈漲搖尾犢兒
提草數系吾亦佳行思小酌映屋樞火酒帘翻

遊画

昨夜山中雨為花紅半淡未愁春色老繞屋綠陰齊

漁樵問答

遊遊蛟逢危共乘危亦似官居踏襪履誰識山崎江
穩安一杯相抱共忘情

○先改書法号今の偽考を任今の序上、現又此處に
のり改二程一程と記して此の能保中より改記して今和
利其の書法号を底海布記の共此と一七首部を
其字上の其原書也と出たのであるから、爲に指點
す、論評の方向無刊記本の意眼刊山運刊の六六
と洛河靈法寺の開校の八字を左刊記本即ち
言上の首部の「あるまゝ」を換刻したものである、
師直本の異版の末に跋文を換刻して附記した
りあるが、相対比して見ても真を家からする所も
偽もほとんどあることかうらむべき。

別其是 非也	論語卷第十 經一千二百二十三字 註一千一百七十五字	慈眼判 正運判	各內要法寺內開板
別其是 非也	論語卷第十 經一千二百二十三字 註一千一百七十五字	慈眼判 正運判	各內要法寺內開板
別其是 非也	論語卷第十 經一千二百二十三字 註一千一百七十五字	慈眼判 正運判	各內要法寺內開板

（本記刊無長慶）本原造偽·本造偽·語論版寺法要

絕筆頌曰
以此少分贊經力，施他深演無窮盡
所獲利樂悉迴向，菩提實際眾生界
首楞嚴義疏注經卷第十二

師且熱學令生德尤不可勝計則是曠劫
罪障何以消除因茲謹開以
真詮之板以救積業之根而冀上報四恩
下資三有同出妄想奢城共入
楞嚴覺場
曆應三環孝奉中濟戒嚴守高師且敬誌

師直版首楞嚴經·偽造本（坐談會記事參照）

絕筆頌曰
以此少分贊經力，施他深演無窮盡
所獲利樂悉迴向，菩提實際眾生界
首楞嚴義疏注經卷第十二

師且熱學令生德尤不可勝計則是曠劫
罪障何以消除因茲謹開以
真詮之板以救積業之根而冀上報四恩
下資三有同出妄想奢城共入
楞嚴覺場
曆應三環孝奉中濟戒嚴守高師且敬誌

○書史の刀剣の例を出れや、庶民
則ち刀剣の味をみよ所かく刀剣の叙を入る
伊勢家の例を奉りて自今口の中にあくいかに
挿入してや

○現に斯う言ふ話がある。是は刀剣の方ですが、肥前の忠廣が大變繁昌した。鍋島家のお抱へ者となつて、あれ位賣れたものはない。其の當時「肥前の國忠吉」の五字の偽せを書くだけで、湯島に居つて土藏を二つ建てた奴がある。それは唯其の字を書いて似寄つた所へ其の銘を拵へる。さうして一分とか一分二米とか取つたものであつて、それは實に堂に入つたもので、恐らく本人が再び出て來てもそれ程には及ばないであらうと言ふ位。あの字のやり方と云ふものは餘程難かしい、一つのあつたものさうです。

○あれは何ですか。彫る人が別に出來て居ないのでですか。

○刀工自身がこつこつやる。庄司直胤と言ふあれなんかをかしいですよ。佐倉へ三年ばかりお抱へになつて、或年、年頭の御祝儀の帳面を附けた所、當り前には書けない。それで筆を左手に持つて、金槌で打つ様にして書いた。さうすると立派な字が書けたと言ふ。(笑聲) そんなものですよ。それですから、偽をやるにも其の呼吸を心得てやらないと心持ができません。偽筆物と云つても其の位苦心してそれで欺くのであるから、欺かれるのも無理はないだらうと思ふ。唯それを他人の名前を取つたと言ふ點が悪いのですけれども、或は本人以上かも知れんのが幾らもある。

○結局欺かれる方が悪いと云ふことになる。

又左の切り板も庶民の例はあつた
山の伊勢と某雜法とある時
の史料と保せりしこゝはぬの
お

○大成經のお話が今出たのですが、それにくつ附いて一つ皆様を差し置いて甚だ僭越でありますけれども、私伊勢の關係が大分あるものですから知つて居ることを一寸申し上げますと、あの大成經と云ふのが偽書だと云ふことは昔から言つて居る。如何にも尤もらしく拵へたものである。あれはどなたも御承知でいらつしやる譯ですが、道海潮音と云ふ坊さんが拵へたと云ふことになつて居る。けれどももう一層潮音に之を掛けた悪い奴が居つて第一に潮音が瞞された。あれは原來が伊勢の隣國の志摩の國に神宮の攝社で伊雜の宮といふお宮がある。あれは昔は相當の神領が附いて居つて江戸時代でも大分繁昌し

た所なのであります。其伊雜の宮の方では昔から天照大神は伊勢を御本社と爲されて居るが、一番最初には志摩の國の伊雜の宮が御本社である。それが今の伊勢へお移りになつて、此の伊雜の宮が本當であると昔から言ひ傳へ居つて、殊に江戸時代になると盛んに其の説を言ひ振らして居つた。けれども證據が何もない。其の時分、あれは丁度五代將軍綱吉の時でありまして、伊雜の宮の神主に水野采女と云ふ……水野ははつきり憶えませんが、名前は確か采女と云ふ神主であります。此の神主は相當古文書、古記録、或は古畫と云ふやうなものに明らかなものと見えて、古い記録、文書を見付け出して、それへ色々種々様々の古記録から書抜いたものをくつ附けて大部のまあ歴史年表と云つたものを拵へ上げて時機を待つて居つた。すると云ふとあの時分に潮音と云ふ黄檗宗の坊さんで相當學問も出來、おまけに綱吉將軍のお母さんの桂昌院の御歸依僧と云ふので大層羽振りが利いた。さうして潮音が神儒佛三道を講ずると云ふことが表看板になつて居るので、是幸ひと水野采女が潮音の所へ古記

録を持込んで「全體伊雜の宮には斯う云ふ立派な古記録があるのですが……」と見せた。それを見せられて潮音がすつかり信じてしまつて、成程是が本當であらうと、潮音が一杯喰はされて、さうして編纂したのが七十何巻の先代舊事本紀である。すると云ふと内宮外宮の神主共が騒ぎ出して、「怪しからん、伊雜の宮が本當の社だぞ」と斯んな書物を拵へて、内宮外宮の講中を取らうと云ふのだ。甚だ怪しからん。」と言つて江戸へ持出したらしい。さう言ふことになつたので、其の時分どう云ふ風にして調べましたか、兎に角段々其の一件が露顯して來たものでありますから、そこであの本は絶版とした。田島

屋利ハトウあふまはるひも、ハカ物ハ焼
キ捨タシム潮音と采女ハ流石
る所を潮音ハ信光ハ母桂
院に助けられ上野里御所の任職
ナリカサハいれりてイ

す。斯う言ふことを伊勢でしよつちう言つて居る譯であります。まあお寺やそれからお宮などに出て來る縁起物とか何とか云ふものは、矢張りそんなものの類で、皆んなこけおどしの餘程怪しいものが、今お話のやうにあるだらうと思ひます。是は大成經だけに就てですが……

○大變詳しく御存じですね、采女など一寸も知りませんでした。

○徳富先生のお話では大成經を作つたときの材料はそつくり上州の黒瀧山に在るさうです。

○潮音と云ふ人は悪いこともやつた一方には佛書で良いものを著して居る、なか／＼の學者ですね。

○あれだけやつたことは偉いね。

○なか／＼出色な所があつた。

○どうもあゝ云ふものを拵へるには餘程力がないと……

○根柢がないとやれない。

○歌學の書物などは、平安朝の歌學の書物なども、鎌倉時代には、まだ實物が大分残つて居つただらうと思ひます。色々當時のものに引用して居る關係から見ても……それが室町になると大分古い書物が見えなくなつたので、そこで後からの書き加へて古いものをもう一度拵へ直して居るものが随分あらうと思ひます。

○兎に角室町時代になつて、例の東山時代に大名達に品物をやる時分に、段々材料は無くなつて來ると云ふやうな所から、古筆なども勢ひ模造品をこしらへて之を與へたと云ふ様な事が起つて來たのです。そこで後に、抑々贋物が多くなつたから、鑑定古筆家と言ふものが出來て來た。さうすると關白秀次など餘程贋物を拵へただらうと思はれる。

○秀次の時分にですね。

○秀次が言ひ付けて拵へさせた。それから其の次に、秀吉にした所で、道具類でも書畫類の外矢張り書物のやうな類、伊勢物語、源氏物語、古代の名筆と云ふやうなものの方々へやるのには品物が無くて、佐和山で出來たものである。石田三成が命を受けて、公卿さんへの進物に

貫之の自筆本をやれとか何とか、なか／＼佐和山物でさう言ふものが出來て居る譯である。それから今度江戸時代になつて來ると尙ほひどくなつて享保の名物調べと言ふ時代になると、あれは二番物を一番物に直し、三番物を二番物に直し、順繰りに位取りを上げて居る。例へば二番物と極つてゐる爲家卿の書いたと言ふ鑑定書をすてて、位を上げ一番の俊成卿等の筆と鑑定書を直してしまふ。享保の御調べにはまあ品物が沸底したので、據所なく一枚づつ上げて居る。書畫などに至つては皆んなさうなつて居る。

○一體古筆と云ふものが偽筆の元祖です。

○例の琴山の古筆の極め書位よい加減なものはない。古寫本などはいゝ加減名家の自筆に拵へ上げて居る。

○手鑑がさうでせう、皇室式微の時分に詰り言ふと公卿さん達が糊口の爲に書いたと云ふことだけは確かかと思ふですね。其の書き方に二通りあつて、一つは大部の書物源氏のやうなものを、高貴の人々が錢を取る目的を以て書いて、それは諸大名の嫁入道具とか何とか言ふ所へ

ういゝういゝのあしうさうさうあつたうさうさう樹の全うさう
所がある。そこういゝ山あ美の無いと七言の得の山は歌味
つけのういゝ樹木は、樹木の群をういゝ國をういゝのが森林
ひある。今いゝ山登樂が流行だが、一概に山頂を全うさう
ういゝ鏡をういゝ山祇征降をういゝとあつたういゝ山ういゝまじい
べきよのあつた森林は、女ういゝ女の奥深いのういゝと神祕
の境ひあつた、玄妙の趣い、ういゝういゝ山の自然の境と境ら
ういゝ。然るに登山者の概ねこれを測却してあつた、此の幽玄神
祕の境も踏査せう、山の征服とあつた、高峯とあつた
とあつた、斯くういゝ自分いゝ大規模の森林を踏破せう、往時
ういゝういゝ森林のういゝ生活をしたこと、ういゝういゝが森林の趣味
の切りかゝつてあつた、外國の深い森林を見ることがあつた

ういゝ活動ういゝういゝ森林の風景がある、と古人がういゝういゝ
けう、森林生活や森林探検の物語ういゝういゝを好んで讀むは、森林
趣味のういゝあつた。伐木下りの音を聴くのも、思ひあつた、樵夫
と語つたのも、炭林火の息をういゝういゝ皆、雨あつた。森林に就
て、自分いゝ幾何の往時、ういゝういゝの、切りかゝつた、思ひ出もあ
ういゝういゝ語つた。

自分の少年時代、町いゝあつた、習俗いゝ山あつた、とあつた
ことをういゝういゝ井南持でういゝういゝ山いゝういゝ一日あつた
ことをういゝういゝ、自分いゝ其れから、森林林をういゝういゝ、此
のういゝういゝういゝういゝあつた、未だか、ういゝういゝういゝういゝ
海あつた、ういゝういゝういゝういゝういゝういゝういゝういゝういゝ

二十六年正月
 其長年時
 鉛の山 三つ
 新しき形
 十二宮の山



山并のツケス

うやうやうにとやへてあ
 の、赤林と味の決りて無文
 流してさうい。

白輝を焚く古士山并床おぼ
 の一夜
 伐木と老の痛快、運材と兄
 の壯快

井伊大老の茶湯一合集のまじかき回ののこ云々

此者の茶湯一合の如流之文の心を委曲あつても
 故に題名を「一合集」といふ。從今今を深き之を
 あり、柳茶湯の交合「一期一合」といふれとへん、或は
 ちいさく「一期一合」といふれとへん、或は
 のことと思ふ、實に我の世一合の公事。あつても
 其のまじかき心を解し、聊も意味を存し、深印實
 意を存し、客も此心、又逢いかたさうも解く
 事、まじかき何一つもたろか、まじかき、或は
 ちいさく「一期一合」といふれとへん、或は
 まじかき、一期一合、一期一合、一期一合

五洲の茶の類

茶をこぼらば人世多しといふも茶をよむ喫する
よみ又すくす

とふかふかしのちりを先づ掃きとてさへかうけり字法
のつみくた

五徳は南の一枚を添へて自煮自漬

こと一げき世とておきこれぬくも清き心とてく
え

黒茶の茶碗の上へ茶杓と茶釜をて互に自煮

自漬

すめの利の月をあかひておのかからくまらきし心かた
らひをす

ある又懐石の字片をちいそ口取の所は茶を煮終つても一
合をこぼれ且漬茶とて残るは揚枝一本のみをあらわす
次のぬくまのてみる

揚枝ぬすおかつくろくは付きとおひとをの減二期一

今らの茶の湯、すし、再びハあひがたきもろく、然らば

すむも此へ合をこぼれ且漬の福茶とて残るは揚枝

一本はあらわす、かく大切に懐中しおち物とて互

に扱揚枝のうくら、年月日何れも何れもあらわすと此の

取かた付豆ともろく、すすまも其の心もさる、さる

おほい申へ有るへき茶の湯とて、仕入の揚枝とて

心をとる、よのぬすも、むす揚枝の持かへし

一本扱揚枝のみ扱扱は法

自合大夫の以上の心書に感得して書翰を書くと云ふ七一
一分の考あるべしと時々説けども此亦之と云ふ一
かせよ一為め、世に困ることもあつたが今、潤に他
て字一すく、末文楊枝の義のこゝに心付かせし
が、然るにさういふ。め、何れも感得して、茶人の懐
と春とさういふ批は平帳を折る、いろく書き
こみ、何の心念とさういふ行の心付いふ、一切
一心の大切の心念とさういふ他は、残すべし、と云ふ、如
何も一本の著あるのみ、いふ、自分茶あふ、用
や、くりこせ、一本の著を、さういふ、茶人の主人
みつ、けつ、し、之を、他のも、故あるか、ま、い、茶
の年月、を、記し、可、け、この、紙、行、い、れ、は、ま、い、も

257

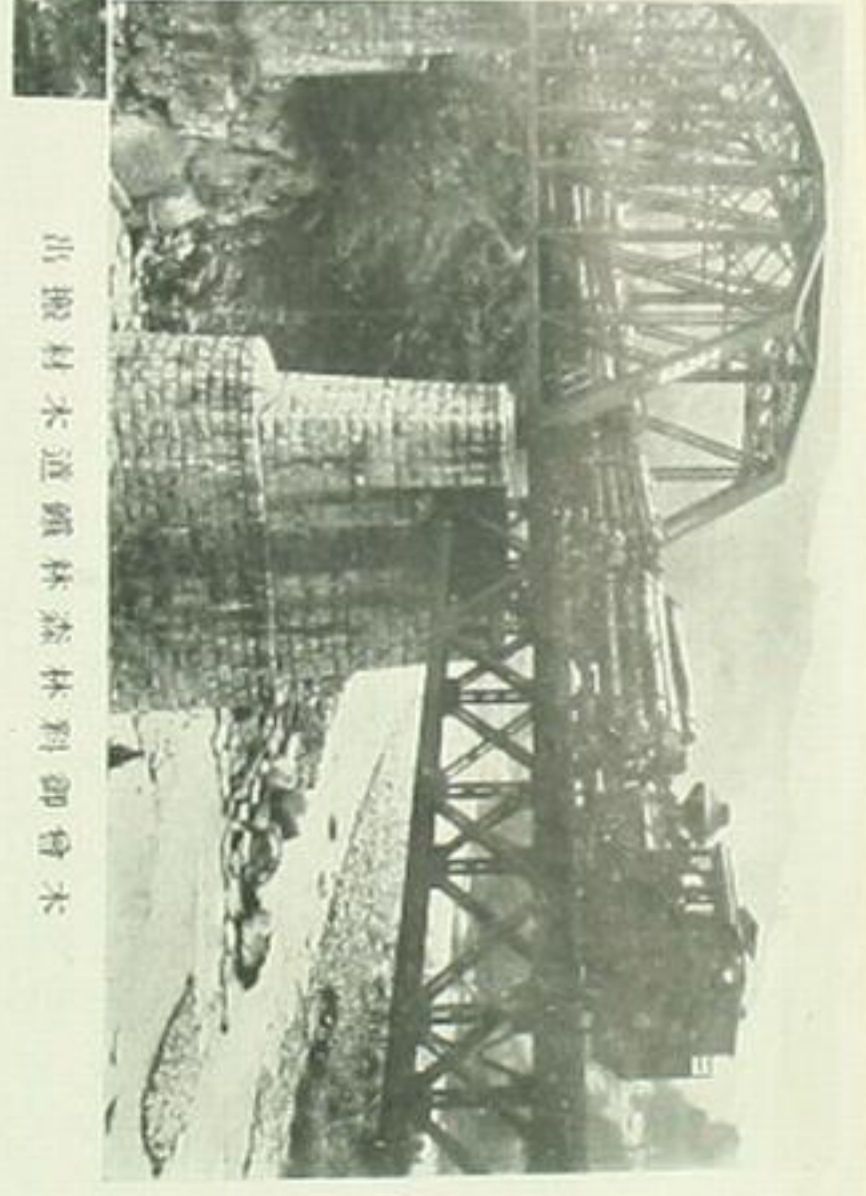
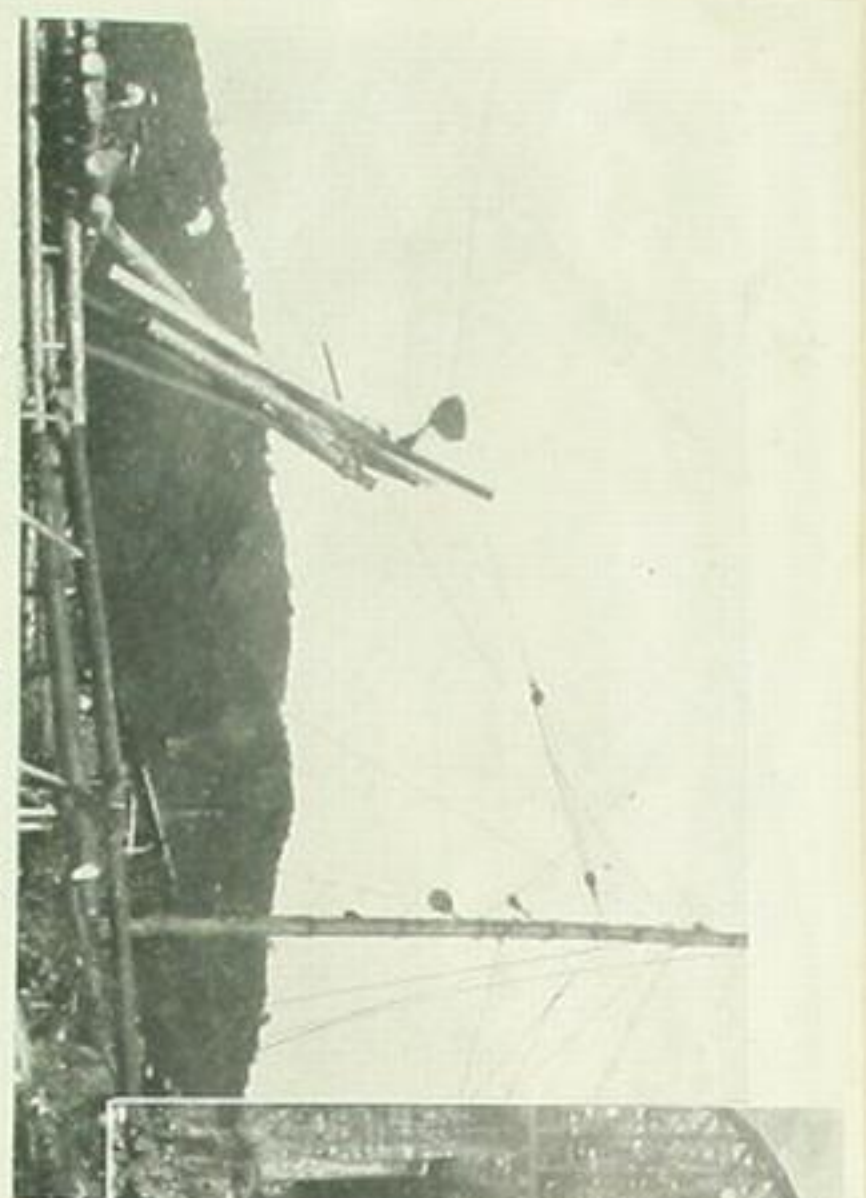
ふ、さ、ん、く、七、に、念、の、あ、め、さ、し、ま、さ、ん、を、茶、を、書、つ、て、ま、さ、り、
ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、
二、折、の、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、ま、さ、り、
お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、
ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、
つ、い、楊、枝、を、記、し、可、け、この、紙、行、い、れ、は、ま、い、も
ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、お、れ、ま、い、と、

市島春城先生推薦文

自分は酒を嗜むから云ふではないが、酒を飲む
ことを常に藝術と心得てゐる。随つて酒が藝
術品であることは云ふまでもない。自分の友
人に豪酒家がある。其人が學位を得た時、本人
何を感じたか、自今酒を廢すこと云ひ出したので、
自分はその祝賀會の折、その非を鳴らしたこと
がある。實は酒を大いに飲む程のものでなけ

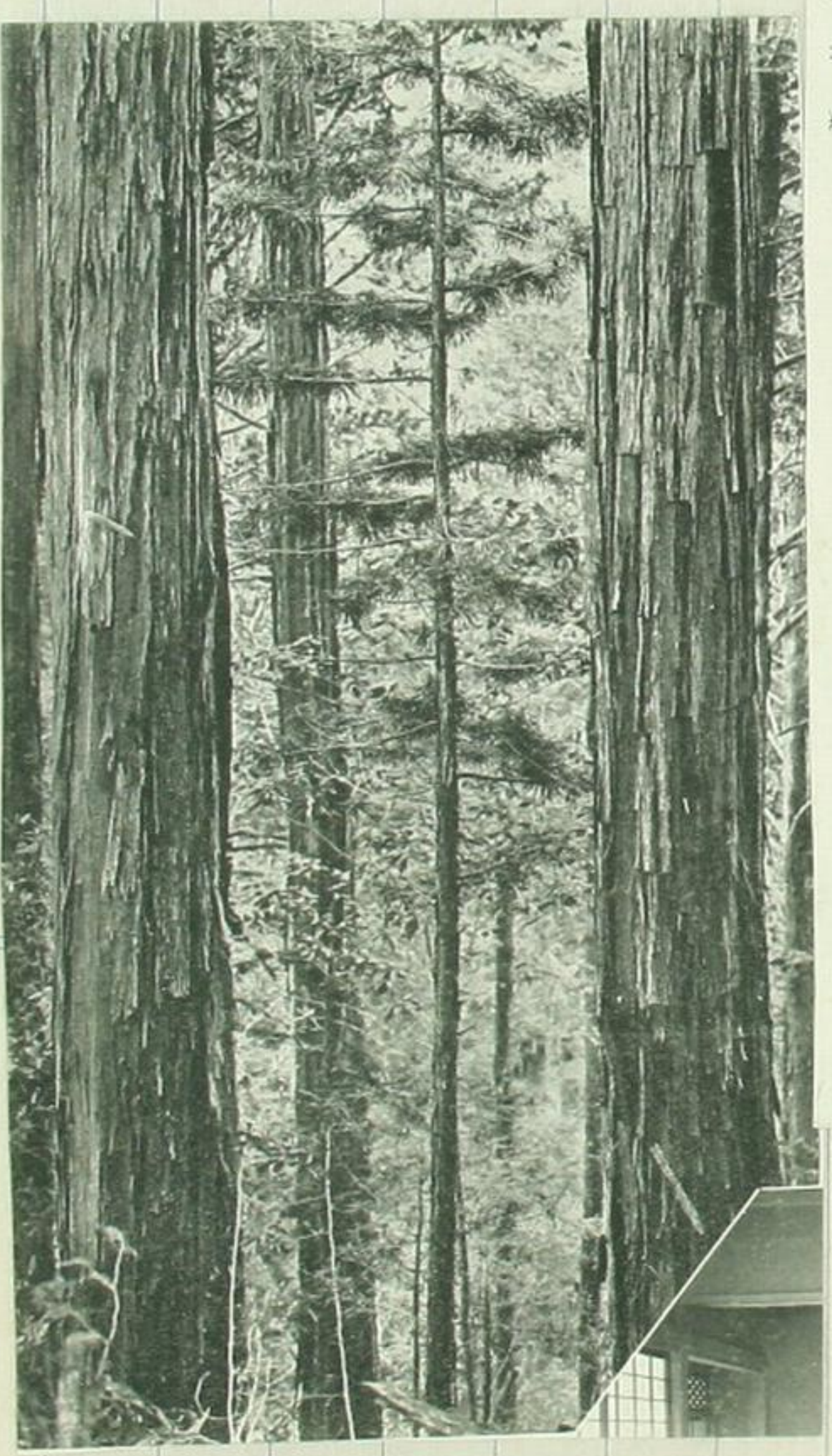
れば博士となり得ぬことは自分の持論であるが、
自分は飲み足らんと思へて、まだ博士とならな
い。然るに爰に感心な同郷人がある。中島芳
男君が乃ち其人で、慶應大學を卒業すること、立身
の道を尋ねて、遂に酒舗を開かんことを志し、身を酒
屋の小僧にやつして實地を研究し、今度愈々開
店するに至つた。自分は其破格の決意を壯し
し、其販ぐ所の或種の酒を飲んで見ると、その芳

皇朝の住居も此材を用いん前年三百年後者ハ
 其料十年を経過し其も朽を免るいのが何事りの証
 此と云ふいは右の如く耐久カス他優つて塔の如く
 上の木材は美術的建築の材にして一而も其價格ハ
 比較的廉價であることも此の長所なるを信じて候こと
 此材今も各地の林産物の工製品も多々出陳せん森
 林の味を懐くんとする皆今自分も好資料を懸つて
 九月日記



業作の樹材集

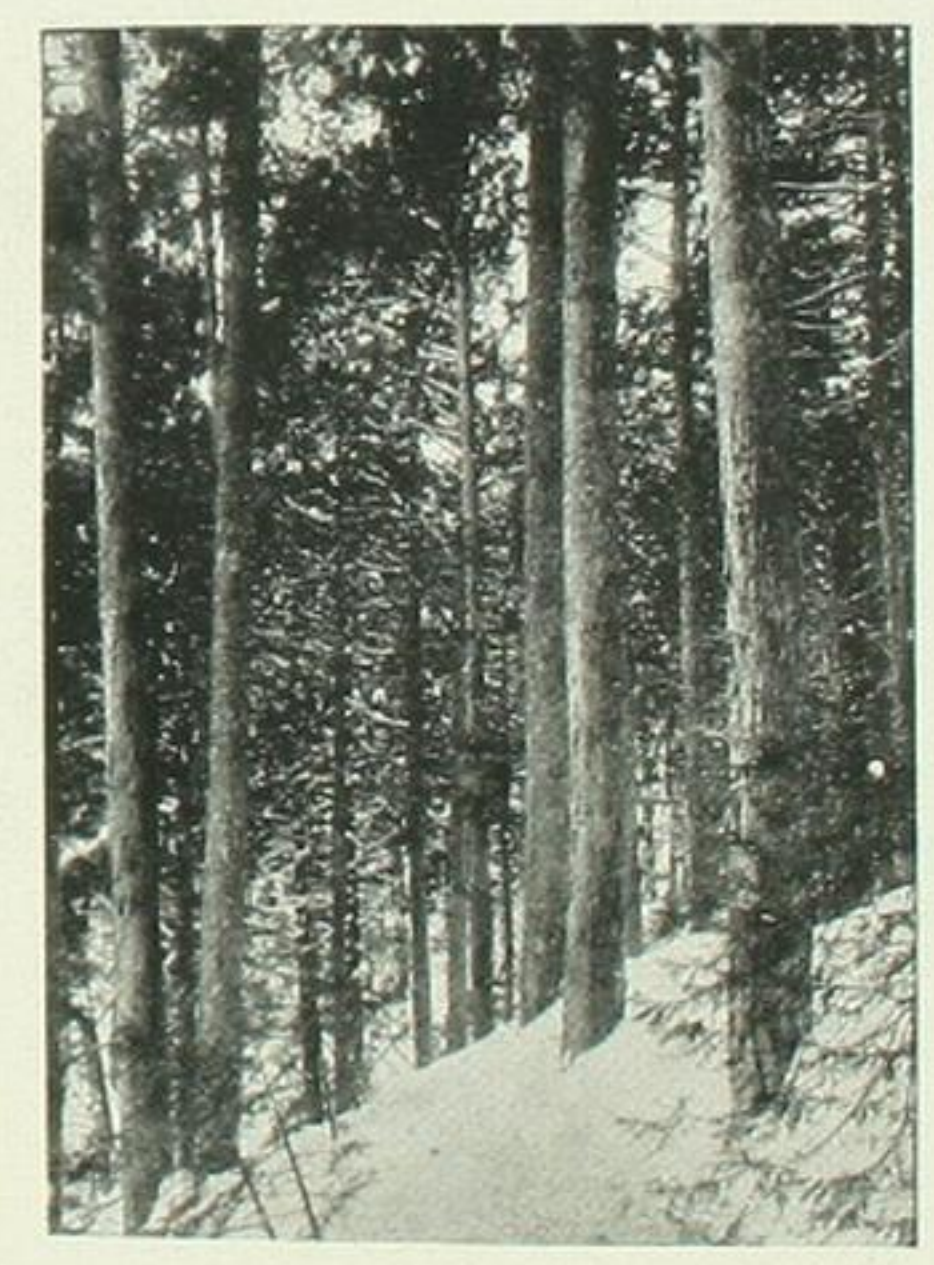
出陳材木道鎮林森林判御曾木





杉林

ひば林



○切時の思ひ出さう瑞穂とまろしき杉林のうらをトワケ白く
 いて又も物々しきまろしきひば林のうらを思ひ出さう
 木林のうら陰樹とまろしき杉林の深味、杉の枯枝の

無名

巖骨の風味、山林中杉林の老伐木枯木川流し
 田川の狭い高き木林の傳つ涼、まろしき下村の小杉谷の
 疎まらざること、森林風味の庭園に遠く下村の小杉谷の
 別荘名七巻の八咫鏡を遠く補へること、飯沼森林の
 近海とて瑞穂とて北海道とて春のけさること、まろしき
 が漸やく一と通り、杉林がとてのひ、筆化、二日を長
 く脱行して遠く杉林に投る、まろしき森林風味の
 とよ森林風味の一端を春のけさ、森林道を歩む
 春の森林風味とまろしきまろしきまろしき
 日高山植物園の前田晴山の森林風味を書れ、まろしき
 杉林の風味とまろしきまろしきまろしきまろしき
 まろしきまろしきまろしきまろしきまろしき

*** 高山植物の花季 ***

天然の高山は、半年以上雪に埋もれ、五六月頃漸く雪が消え
ると共に、忽ち新嫩を生じて、七八月頃一齊に開花するが、秋
と冬とが一所に來るから、此恐ろしい脅威の來らぬ間に、結果
蕃殖の機能を果さねばならぬので、鬼の居ぬ間の實に忙ただし
い生活である、従つて花は上記の如く、七月から八月にかけて
百花爛發であるが、下界へ來ると季候が違ふ爲に是等の植物は
四月末から五月へかけて、我劣らじと咲き誇る、それも結構で
はあるが、五月頃は春からかけて花の多い時、願はくは下界に
在つても、高山自生と同じ七八月頃に咲かせたら、一入の美觀を
衝ふだらうと思ふが、天然の氣候ばかりは、如何ともする事が
出來ない。

*** 高山植物の越冬 ***

彼等が山にゐると、疾く十月末から無情の冬に閉ぢられ、五
月末までは、鐵板も管ならざる堅永の下に封じられる爲、如何な
る严寒にも堪得るやうに考へられるが、案外下界に於ては、寒
威の迫害の爲に種殺するので。

*** 高山植物の培養 ***

高山植物の栽培には、土壤の選擇が最も肝要である。在來も
之に就ては、可なり研究されたものだが、土といふ字から離れ
る事が出來なかつたので、如何なる植物の場合にも必ず山土
赤土の類を加味しなければ氣が濟まない。今日の如く、天神川
砂や富士砂（熔岩礫の粉末）のみに、始めから植込むといふや
うな、破天荒の度胸がなかつたから、失敗したのであつた。

又高山植物が漫りに情を牽き、韻致深い姿態を誇る點は、草
の丈が低く莖葉共に矮蹙し、殆んど地に蔽するばかりで有りな
がら、花は比較的に大きく、或ひは寒威を防ぐ白毛茸などを密
生してゐる處にあるが、之を下界人寰の處に移すと、日光の透
射は悪し、温度は急に昂まり、夏の夜になつて、高山にゐるや
うな寒冷の氣を受け得ぬ處から、莖葉徒らに冗長し、自毛茸な
どは、一切不必要になるので、如何に眞眼に見ても高山植物
の面目を望む事が出來ない、深閨の婦女が風塵に殖ちて、カフ

雪は冷たいには違ひないが、浩蕩として千山一白に珠を綴る
と、反つて地熱の放散を妨げる爲に、地表は案外温かく、且つ
意地の悪い風が吹き荒まぬから、彼等は心靜かに冬眠を貪り
得るのだ。然るに下界へ拉致し來り、薄盤に移植して庭園に放
置すると、激烈な寒風に骨を刺され、根まで凍盡するので、來
年の萌芽の、業に兆してゐるのを枯死せしめる場合が多い。其
處熱帯の産てなくとも、綺麗に枯れてしまふ事があるから、嚴
寒には必ず覆ひ下ぐらゐへ取入れ、且つ植土が乾燥に過ぎぬ
やう、常に注意すべきである。植木は夏に枯さずして、冬に枯
らすといふのは乾燥と湿度との調和が、鉢の大小深淺によつて
手加減があるからである。

シヤクナゲ類や蘭科類などは、低温室で開花を促進すると、
二月始め頃に能く開花するが、此場合には、前年の冬季に、數
日間霜を結ばせてから、温室へ取入れべきで、秋から其儘移入
すると、花になるべきものが葉になつて、肝腎の目的を達し得
ぬ虞れがある。

要するに人間に、何かの趣味がないと、凡てが硬つぱしくな
るから、人生に軟らか味を興へるには、人の厄介にならずに獨
樂される高山植物などは、最もふさはしいものではあるまいか
強ち我田引水とばかりは言へまい。

エーの女給と成下つたのである。慎ましかな温良貞淑の態度
は棄にしたくも無くなる。

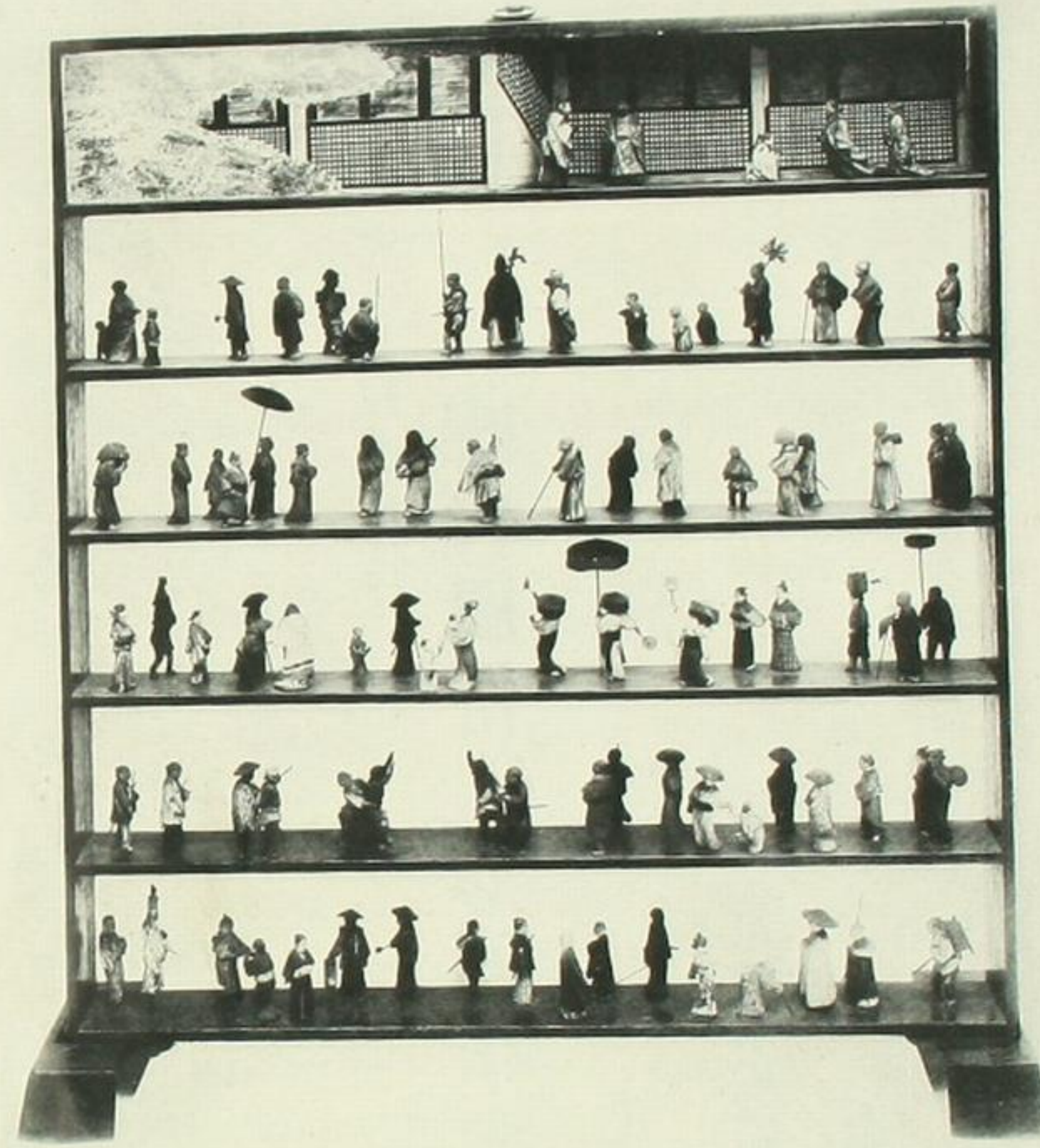
然し恠ういふ缺點は、多年の研鑽によつて脱却する事が出來
た。假令薄い平盤へ植ゑたものでも、熾烈な日光に浴させ、通
風佳良な處へ置き、施肥や灌水の注意によつて、昔ながらの自
生状態を保持する事が出来るやうになつた。インチキの霧雨や
清水の注入などは、有害有つて一利無き事が解るやうになつた
のである。

*** 高山植物と肥料 ***

人間が空氣と水でばかり生きてゐられるなら、高山植物に施
肥は無用だが、丈を覺めて木を肥らし立派な花を咲かせるには
相當な榮養分を興へねばならぬ。

彼等は高山に自生して何等の肥料にも恵まれぬやうに見える
が、實は凡百の草の葉の枯れたのが腐朽して、天然の肥料を供
給されてゐるし、又自生地は彼等の適所だから、それほど澤山

肥料と愛のぬい



衆一人百重九作慶隆

隆慶の九重百人一衆

西澤 笛 畝

享保二年の秋に還暦を迎へた佛師清水隆慶は、暮れ行く秋の東山に鳴り響く鐘の音を聞きながら一人しきりと何にか考へてゐた。

筆をとりあげたと思ふと机の上の懐紙にさら／＼と一句を認めて微笑をもらした、そうして獨りでこんな意味のことをいつた、
 「悴も漸く仕事に上達したし娘も幸ひに大きくなつた、それに家業も基礎を堅くしてある丈けに心配もないまあ自分は此上もない幸福者かも知れない……此上は世の中の爲めに何にか一つ仕事の上から謝恩的に代表作を計劃しよう。それには當時の風俗を寫して木彫人形の上で後來へと残してをこう」。こんな風に決心がつくと、嬉しさに思はず晩酌の盃の數を過して了まつた。

—老樂の天業ゆるせ秋の暮—これは其時に作つた一句である。それからといふ者は、毎日／＼朝早くから洛中洛外をぶらり／＼と、夢遊病者の様にあちらこちらと歩き廻つて、代表的に特色のある風俗を見出すことに心を傾けた。或時は喧嘩にも出あつた、又、そうか、にも興味を覺へた祭文語りに住吉踊り六十六部に鹽廻し小原の女性に太夫の道中といった風に随分下層の生活を見てあるいた。家の歸ると忘れぬ中といった態度で寸餘の木片に見た印象を思ひ出しながら彫つてをいた、つまりは木彫の寫生である。





りに彼の顔は輝き渡たのである。

こうして冬も過ぎ春を迎へて恰度又もとの秋が来た、一年を経た譯である。

この一年の間に彫り寫した人形の数は九十餘り、我れながらに嬉れしさが胸を込み上げた、そうして、これに九重の奥深き有様をも彫り加へて、當時上下の風俗は一目の中に見られる様に纏まつたのである。数は百に餘つた、納める箱の工夫から配置の順序迄楽しみながらに完成を了へたのは享保三年の秋も了りに近かつた。

名づけて九重百人一衆、君民一致上下和平の有様を作り得た誇

この噂は尊き方の御聽聞に達して寂覽を恭ふし、それからそれと名を高めていつた。そうして遂には江戸に迄その話が傳はつたのである。八代將軍吉宗公は京洛の風俗に一しほのあこがれをもち給ひ、伏見の石川備中守をして江戸へ持參の命令迄する様になつた。

恰度享保四年の春江戸城内に飾られたこの人形は讃歎の聲につままれて、一しほの名譽を高めたのである。御簾中様二の丸様それから大名旗本といつた諸氏迄も拜見を許されて、その名は江戸市中に迄一つの話題を作つたといふ。殊更、將軍の御言葉で江戸に止めよとあつたが、隆慶はどうしても、これを聞き入れなかつた。心魂を投じた、この人形京の土地から外にはやらじと又、高臺寺畔の彼の隠居所に無事歸洛したのである。

である。

享保六年十二月、この目出度き歴史を一卷に委細自記して、彼は自分の計劃の徒爾でなかつたことを一人喜こんだのである。

この一代の傑作も愛娘の婚嫁に當つて彼から彼女に引出物として贈られたと云ふことである。この嫁入先の久保田家に今に傳はつて人形研究家に隨喜の涙を流がさしめ、當時の風俗研究資料として考古學者の參考となり、並々ならぬ人形の功蹟をうたはれてゐる。



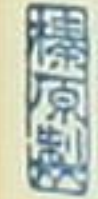
私は震災前に一度この人形をみて、忘れられぬ印象を追想してゐたのである。處が人形集成を作るに當つて今から五年前、京都博物館で手にとる如くゆつくり觀賞して尙更にその價値の並々ならぬに驚ろかされて了つた。

今度池野哲仙氏が、これに刺戟されて風俗人形を作ることになつたのも何よりの事であり地下の隆慶もはるかに知己を得て嘸かし満悦して居ること、私は思つてゐる。何れは是れに倣つて昭和九重百人一衆が生れ出ることも近き將來であらう。

(昭和甲戌五月二十一日記)

○多なる甘口と漸く秋氣を感ふ、こき去つた此の
夏の分をてききりしを願ふも例もなし、
とをせむ家と罷居して五十粒も消した。此暑
候の毎日、半日丈を筆祝と終らし、此の仕合と云ふべ
きか、毎口く目共籍目を青いし種々日能治と投じ、
敢て物敷きする方とも投符するのむき、
あし此のむきも、あせむことなき、
つ鼻して見
ること七月の下旬から今九月初旬まで、
四十五條を
ある。別表の内、口印と附してあるの、
成符の後未
れ能治し、
地のすく切り板を
冊スクリラツカ、
テツリに張り入
んじあるか、
一冊改と満
ちてある。

九月十日記



伊賀山の水記
木村赤風景

○偽書

○偽書

合身上の水便

山あまの忍波

塩礼濱

能歌るも裸体

紅あし人 (七二)

書と手紙

△大隈侯の大あし人 (七三)

陰手紙

東名屋の遊

遊遊吳乃浸淫

印時日田園生流

水室の思い出

能行を動墨蹟

あつり清濁

狩谷極楽

不思地時と符符

眼

書と浸淫

小節屋侯侯 (四角)

呂免浸淫 (四角)

池の湯み福

通人回馬十連

愛憎感

馬廐一百人を獲る

尊唐の漢代魚書記を後

漫談公遊京

兜鼓に類する小品遊京

和国恒吐書

北條新録一巻八千餘紙感

禪と帯

山下田港を訪ふ

奥又彦長游久里濱水滸記

山雲軒とフルベツキ

酒語六十則

井伊の茶人の心境

近衛家の丹醜

狽書漫筆

○丑山の僧が女房の男老を弄んたかゝる書信の一冊

文献に徴するに、この書は、うしろめたに、今、蘭天鈔

から、字句で、五山中世の詩僧と、五冊子と、又、

と、その、いんて、聞する、記す、妙ある

心田清橋の條に云く、清橋、心田と、辨し、法政の人、

嘉永元年、建仁に移り、次、南嶽と、福、寺、か、

歴、其の、持、作、心、田、某、の、中、に、男、老、を、り、詩、加、多

く、見、く、是、下、と、一、書、し、ん、ち、る、文、字、か、心、田、詩、僧、と

も、辨、し、し、よ、い、れ、上、に、及、い、る、ん、が、此、の、美、と、思、ひ、ん、る

序、文、か、い、れ、添、の、り、し、あ、る、が、此、の、美、の、年、も、聞、す

る、よ、い、あ、る、心、田、の、お、と、う、の、れ、雅、兒、の、梅、と、云、ふ、也

い、よ、あ、る、の、美、貌、は、あ、つ、れ、と、思、ひ、ん、か、り、秋、の、夜、に、

終るべくも梅表衆のふもいひしとせんも奥味いも
深のことと笑ふか、せんも美少年の節すも
時、保の里衆と切るふ惜しと泣くところを見る
と道我文書とちいしき、ゆりも遊三夜、日の
不情がふつと、ぬい氣おむ、垣らぬぬと天鼓の
海してゐる。

天鼓のるは心の次に、男も文書、の世も、
三登水園と争けしめる、三登の建仁寺如是院
に住し、日月舟常、河清、西若、と游人ひえ
ふ、三秋の比、暮のうそ、三登、河、三登、觀河、か
あつ、後おが即ちまん、一談、し、市時、昔、春、
の里も、就り、花、ま、ゆる、男、の、あ、つ、れ、こ、

がふ、雅以し、女、お、手、を、君、を、以、て、撫、し、は、こ、も、あ、る、
釋、院、か、君、の、お、手、か、ほ、ひ、あ、る、後、の、釋、院、か、れ、手
の、行く、出、向、く、の、を、新、幸、と、呼、び、一、葉、の、中、の、四、月、四
日、の、又、を、行、幸、の、初、め、と、い、は、し、や、ら、七、夕、の、夜、と、い、
合、款、の、又、と、い、は、し、や、ら、雅、院、か、手、紙、に、依、り、と、行、く、と、
ハ、黄、帝、の、鏡、と、い、は、し、と、進、み、初、更、の、鼓、も、持、つ
と、進、み、一、げ、ん、の、東、向、の、寺、邊、と、衆、人、に、昔、の、も、
か、あ、つ、れ、ま、し、横、の、茶、二、つ、七、こ、の、方、面、の、花、の、
さ、う、さ、う、ま、く、心、の、れ、い、ま、い、ま、い、こ、ん、寺、の、は、つ、の、鞠、也
五、風、集、を、え、ん、と、ま、ま、都、の、ま、い、こ、の、れ、一、葉、を、喫
ま、し、と、ま、あ、ら、天、鼓、の、り、ひ、き、し、月、夜、の、あ、い、
〇、自分、の、い、つ、り、や、屋、の、人、の、心、境、を、さ、う、と、茶、人、不、知、新

我を考し、其の心境の活動する所のありきと云ふべし。こ
とあり、今吾人の心は、**口茶人の眼**のことにあり、**意**
術家の心境の皆斯の如しと云ふべき歎、詩を棄てて人
唯以黙りて、**癡**なるか如く、**心**の中、**推**敲
ハ此句、**心**の活動する所の、**前後の成**、**山**、**音**、**油**、**如**
何と所謂の苦吟、**心**の動する所の、**外面の平**、**静**、**と**、**似**
るべく、**心**の活動する所の、**因**、**心**、**意**、**家**、**容**、**も**
筆を下す、**或**の如く、**唯**れ、**不**、**や**、**決**、**思**、**も**、**何**、**手**、**か**、**愁**、**か**
る、**如**、**き**、**趣**、**を**、**あ**、**ら**、**へ**、**る**、**こ**、**も**、**此**、**何**、**こ**、**も**、**画**、**家**、**の**、**胸**、**中**、**の**、**志**
匠、**も**、**覺**、**れ**、**ぬ**、**る**、**胸**、**中**、**の**、**画**、**成**、**つ**、**て**、**始**、**め**、**る**、**之**、**れ**、**を**、**某**、**の**、**托**
苦心、**の**、**容**、**も**、**が**、**う**、**る**、**思**、**惟**、**の**、**筆**、**も**、**全**、**力**、**を**、**傾**、**け**、**て**、**動**、**の**、**心**、**の**、**あ**、**ら**
甚、**し**、**き**、**時**、**も**、**胸**、**中**、**の**、**画**、**成**、**つ**、**て**、**始**、**め**、**る**、**之**、**れ**、**を**、**某**、**の**、**托**

此何とも

其の、**某**、**の**、**托**、**も**、**や**、**疾**、**風**、**の**、**如**、**く**、**外**、**面**、**活**、**氣**、**を**、**見**、**る**、**如**、**く**、**此**
時、**も**、**人**、**の**、**唯**、**れ**、**此**、**の**、**時**、**を**、**見**、**て**、**動**、**を**、**知**、**る**、**也**、**沈**、**思**、**黙**、**一**
片、**の**、**静**、**境**、**に**、**大**、**き**、**の**、**動**、**き**、**の**、**あ**、**ら**、**る**、**を**、**知**、**ら**、**る**、**也**、**彫**、**刻**、**に**
於、**て**、**も**、**武**、**藝**、**に**、**於**、**て**、**も**、**舞**、**臺**、**の**、**術**、**に**、**於**、**て**、**も**、**皆**、**然**、**る**、**也**
こ、**の**、**こ**、**の**、**古**、**歌**、**の**、**淡**、**き**、**波**、**の**、**こ**、**も**、**此**、**の**、**浪**、**の**、**主**、**つ**、**と**、**あ**、**ら**、**る**、**こ**
と、**く**、**深**、**き**、**淵**、**の**、**唯**、**れ**、**此**、**の**、**浪**、**を**、**見**、**る**、**如**、**く**、**此**
舟、**を**、**知**、**る**、**浪**、**の**、**主**、**つ**、**所**、**の**、**氣**、**を**、**知**、**る**、**浪**、**を**、**主**、**つ**、**と**、**あ**、**ら**、**る**、**也**
こ、**の**、**所**、**の**、**氣**、**を**、**置**、**く**、**也**、**某**、**の**、**舟**、**を**、**知**、**る**、**文**、**實**、**を**、**鑑**、**を**
運、**ぶ**、**何**、**等**、**の**、**舟**、**を**、**知**、**る**、**唯**、**れ**、**空**、**鑑**、**を**、**運**、**ぶ**、**時**、**も**、**か**
う、**く**、**の**、**聲**、**を**、**聴**、**く**、**深**、**き**、**淵**、**の**、**形**、**の**、**静**、**も**、**あ**、**ら**、**る**、**也**
某、**の**、**舟**、**を**、**知**、**る**、**而**、**も**、**吾**、**の**、**術**、**の**、**淵**、**深**、**の**、**こ**、**の**、**存**、**り**、**也**
こ、**の**、**何**、**れ**、**を**、**知**、**る**、**動**、**も**、**人**、**の**、**見**、**る**、**能**、**は**、**る**、**の**、**也**、**若**、**し**

此何とも

○自今もが証人として出立し徳川侯對同方館協会の
任事事件 争うところの徳川家の預け金五萬圓大庄
一の事件、是れ才二番で此の場合の敗訴は此の如く控
訴の結果勝訴とする。此件は故頼倫侯と親友の
二ハ若し一事件に勝つれば当然に勝つる。然るに
この感慨を禁し得ぬ。頼倫侯自ら南葵文庫を
建え此程の用者領え理解のありし人の去り去場を
の法裁とすうりも百方撫育せられた協会の金もあつても
法裁の庇陰と爲るよふである。而して侯亮して後訴法
を以て預金の目取戻と争ふは、めづりし意思
の強ひがらぬいふもあらう。平等に忍びざるは、七も
九も、大なる此の五萬圓と協会の財産と組こま

あつても協会の社団法人とすうりも、此資産を録し
麻の認可を得ており、此預金も生ずる利率三厘四
八協会の大増収収入とするため、故法裁の争ひ
り見れば、此の徳川家の支出せんとおのの
ある。五萬圓の元金の法裁が寄附を申出さん時元
金を徳川家の預け金とすうりし、別に証書も
當つともいふは、此の預金に對し、存年利息を支
出さん事、實に五萬圓の預け金を五証するといふ
あつても、協会の帳簿も、利息も録してある。
而して、徳川家の追々不始とすうり、此の預金を
見込みつけんと企て、始めの示談的、免許の金に
お切りし、いふ云ふは、其の五萬圓の一事ある

白金打切るるは、協分側として應し得べき事かと思ふ
返に詐訟と提記するも至つたは協分の理事なりし
橋井が曾つて南葵文庫の事務を司り、故佐哉の
従僕なりし間候より、証人として協分より不利なる証言
をさし給ふことハ掛るを感へりし也。敗訴を身とせり
んじ、其の中三の金に虚言をさし、橋井の言ふるは、其の
室の附の條件のきの室附を他人が室附せざらんは徳
川家七室附をさし清原係へ他に十兩十五兩の
室附をさし、その身んは、徳川家七室附と許し、其
款を出すと、頼倫侯の内意ハ此斯くありしと
許んは、其の死人に口を、佐哉加果して斯の内意
は、室附を申し出らんは、其の身んは、吾等幹部のよ

いものさうしよとをいふべきは、何人もいふべし
く、且つ佐哉の人格も、其の身も斯く書のあるべき
是より、佐哉の室附を申し出らんは、其の身も斯く書
合の折は、衆員に起ると感謝を、其の身も斯く書
其の減り僅少の款をいふと、其の身も斯く書、条件
づきとをいふと、其の身も斯く書、勿論も、其の
柄ききと、其の身も斯く書、其の身も斯く書、其の
故侯の盛衰を傷け、故侯の人格を蹂躪せんとす
ハ、徳川家側には、其の身も斯く書、其の身も斯く書、
顔と泥を塗らんとして、協分側は、却つて故侯の切
り、其の身も斯く書、其の身も斯く書、其の身も斯く書、
敷倒的有るは、其の身も斯く書、其の身も斯く書、其の

偽罪七位許延て移を判官と惑す然るを判決する位を揚
くま是れとあり、法向徳川家の毛を吹て疵を求め
預金の今の借入と利子の又出することと出来ず、取
先物米通を元金五萬圓は三年間の利子約を常の
と掛出と取入とをぬることとあり、徳川側のあか
失ちることもあらずが、恐らく上先の理由を案出さるる
あかあらず。自家の免前近來不訴れを先以某圓
丁の預金を踏み替へんとし、横假して圓丁は自殺
し、狼狽し、香黄千圓を出して糊塗し、やが
のちあり、大小の差のあり、徳川家の預金に
了然たるは、徳川の一として大抵、強、不似合の事也

九月十三日

徳川

○自分の解し難いことを書物に一月とせ、始め
てけて、例方の解し難く、例書のゆゑも附け向と
らふ、その解し難く、いつても、其方を授け出さ
ぬ、此書の中も、種々の注釋あり、其を讀み
て、今も、今も、今も、此以、例、坊間、幸、田
而、伴、一、の、大、守、十、二、年、山、石、波、有、名、も、出、し、冬、の
日、お、も、購、ひ、得、て、數、日、讀、む、此、日、言、の、名、目、地、の
と、芭、蕉、が、四、段、野、の、杜、園、寺、五、若、公、等、と、も、の、一、等、
例、語、連、歌、も、一、露、伴、の、抄、ハ、懸、到、り、と、い、ふ、
一、等、と、得、る、一、露、伴、が、切、者、に、是、語、の、深、き、こと、も
初、め、切、り、得、る、一、連、歌、芭、蕉、以、前、の、宛、か、ら、謎、の、如
き、より、を、附、け、向、し、其、謎、を、解、き、以、ん、か、多、し、高

土佐様の浮おの内のあると云ふ
又尚の考とぬんがなる難解の句を必う後世に
解を下すことある難しと云ふ

○宗鑑守武時代の由連統の陳腐政様のもよみ
霞伴の冬の日のゆゑ左のぬき例と挙げても
如とへば、阿保は、あの下ふこそあんと云ふ前句に
何のゆゑも解と難きやう、この南無と云ふ考
のうちより身を投げ捨てと附くんば、前の没巴
鼻のよん理を具して、持解の圖内に入
しとるよみも、これいふ俗の扱ひやう、あま
烟のまつと能く、いへば、混れを前句に、
とあるにあらうと云ふ、後せんけりとも付け、
あまの、

堂より、
お馬に神主のけまうと、
つゝこそるん、
今年又と、
いへん、
り、
の、
犬、
き、
千、
前、
榴

山今日越えしと附けたりんるる貞徳出るる及心
似悟やうやく進みけりも花是のぬきうん少か
くま冬の日の時既に頁つのは腐り癒りて
法木の放肆も亦厭かんとしりるる
○つれくの折股身財石も目他句集以刊大景
子も遊々直に新詞十数句抄採す敢て秀
句と選みたりとあらず自らの意にちしりるる採り
るる

九月十年

物乞の出て去ぬ楊柳きつ
伍柳や枕の花喚く馬の面
門内の花は花はうやに傳こち

古山書

201

一七との梅もうも傷家くくわく
折白しぬかつくわ九が根夜も亦
父花比す白梅二月十甲
蒔き強う茶の定かましく花の布り
比翼連理通とさうまば目刺り子
解ぞめは波めや西湖の春のみ
春の夜や借下駄因し街の泥
客ありし門鈴揺りて屋口も
留守を人かすの煙の人も呼ぶ
駅の名は法隆寺とや霞も花
儀秋てう男のは内酒のま
龍いふき木の間は夏と花の巻も花

先考十三回忌

酒冬り支那り

堂涼しこの和男に化けたり

水鳥と涼しや麻の夜のしる

閑涼し舟も無く静かりけり

灯の消えしきこれ居りけり夏生お

桔梗の紫もど今朝の秋

披麻鼓や秋の日浴びてお夫利山お山

秋晴や馬小きく遠き廻を行く函根

心昂く街の大霧残り露も深徳内巻

帯中の珠さぐりけり秋のみ和次を生く人

夜の曙波や鐘の鳴りけり土の秋龍川愚作

虫七つかす夜せし尾花の或株が聖徳温家地獄公

金の世の右の世の終終羅やの世

一かこの寒の月夜を鐘の音

夕鴉二三羽くろく雪の原

珠言動のす一輝の行天は

先代の寄附の火鉢より撫て、見え菩提寺

大寺や雲閑先に木の志無舞

○現代随筆家の代表的随筆家を編纂する現代随

筆全集十二冊を刊行せんと金田屋重計企画し

七人承認をとりし来る編纂家の大要は全集を

作家随筆の 文房随筆 吾輩の随筆 考証隨

筆 心鏡隨筆 社会随筆 科名隨筆

宗政随筆 美術随筆 紀の随筆 歌味

随筆

木村 毅 尾崎 竹雄 齋藤 昌三 幸田 成友 鳥居 龍藏
 德富 蘇峰 尾崎 行雄 三宅 雪嶺 中野 正剛 美濃部 達吉
 杉村 楚人 市島 春城 下村 海南 松波 仁一郎 堀口 九萬一
 犬養 健 小林 一三 加藤 咄堂 鈴木 文史郎 下田 將美
 矢野 恒太 堺 利彦 吉野 作造 長谷川 如是閑 室伏 高信
 三木 清 白柳 秀湖 土田 杏村 馬場 恒吾 大森 義太郎
 末弘 巖太郎 新居 格 水野 廣德 小笠原 長生 櫻井 忠溫
 羽仁 もと子 平塚 雷鳥 神近 市子 高田 保馬 野上 彌生子
 小泉 信三 內村 鑑三 相馬 御風 友松 圓諦 倉田 百三
 沖野 岩三郎 武者 小路 實篤 大谷 句佛 河口 慧海 入澤 達吉
 高楠 順次郎 加藤 玄智 石川 千代松 山本 一清 石原 純
 吉村 冬彦 正木 不如丘 岸田 日出力 松村 文衛 伊東 忠太
 藤原 咲平 森 功一 三宅 恒方 大町 文衛 田中 茂穂
 高田 義一郎 佐藤 功一 石井 柏亭 橫山 大觀 中川 一政
 田中 阿歌麿 丘 淺次郎 鍋井 克之 橋本 關雪 木村 莊八
 和田 三造 津田 青楓 平福 百穂 小杉 放庵 有島 清方
 岡本 一平 森田 恒友 川端 龍子 太田 三郎 柳山 花袋
 朝倉 文夫 正宗 得三郎 小島 烏水 大町 桂月 田島 生馬
 水島 爾保布 冠松 次郎 坪内 水哉 太田 重治 柳澤 健
 萩原 井泉水 冠松 次郎 坪内 水哉 太田 重治 柳澤 健
 上 司 小 劍 大 佛 次 郎 中 村 武 雄 加 藤 清 佐 柳 岡 讓
 馬 場 孤 蝶 山 田 耕 作 坂 垣 武 雄 富 藤 武 雄 矢 代 幸 雄
 壽 岳 文 草 泰 豐 吉 坂 垣 武 雄 富 藤 武 雄 矢 代 幸 雄
 前 田 夕 暮 有 坂 與 太 郎 吉 井 勇 平 山 憲 吉 柳 岡 讓
 田 中 貢 太 郎 野 口 米 次 郎 坂 元 雪 鳥 高 橋 箒 庵 西 川 一 草 亭
 伊 原 青 々 園 佐 藤 惣 之 助 長 谷 川 時 雨 村 松 梢 風 岡 本 綺 堂
 野 上 豐 一 郎 藤 懸 靜 也 橫 瀨 夜 雨 永 田 青 嵐 永 見 德 太 郎

幸田 露伴 夏目 漱石 森 鷗外 永井 荷風 島崎 藤村
 高濱 虚子 有島 武郎 北原 白秋 若山 牧水 吉田 紘二郎
 島木 赤彦 菊池 寛 河東 碧梧 瀧井 孝作 近松 秋江
 久保田 萬太郎 森田 草平 内田 百閒 室生 犀星 長與 善郎
 薄田 泣菫 芥川 龍之介 齋藤 茂吉 久米 正雄 水上 瀧太郎
 岸田 國士 日夏 耿之介 山本 有鳥 德田 秋聲 萩原 朔太郎
 豐島 與志雄 佐藤 春夫 宇野 浩二 谷崎 潤一郎 堀口 大學
 廣津 和郎 橫光 利一 川端 康成 里見 弴 十一谷 義三郎
 千葉 龜雄 平田 禿木 成瀬 無極 吉江 喬松 百田 宗治
 辰野 隆 戶川 秋骨 桑木 嚴 阿部 次郎 谷川 徹三
 久松 潜一 岡田 哲藏 和辻 哲郎 木下 幸太郎 岡倉 由三郎
 登張 竹風 小宮 豐隆 折口 信夫 坂崎 能成 土岐 善磨
 松村 武雄 金田 一京助 新 村 辰之 白井 喬二 石川 欣一
 成澤 倫川 柳田 魯庵 高野 辰之 佐佐木 信綱 長谷川 魚
 白石 實三 內田 魯庵 高野 辰之 佐佐木 信綱 長谷川 魚

一、全集収録を願ひする筆者芳名(順序不同・敬稱略)

と今も 一巻四六五頁 十五名 乃心二十名と扱ふ
 是れ三十枚乃心百枚 一冊後約二回印税二千
 印上巻行住酒... 仕拂、明流以後随筆
 上巻きり人名ハ左の如し

灯を飾る船山車五つ並ひて錦と見えぬの

上二二

美くもき屋敷の縁をたもたかへん今の世も

又も船乗りつゝも

船かきう絹の燈籠みじ映えまはめき掛り

黄金を流しぬ

廻廊の長くつゞけるごとくも扱を並べり

燈うけあかき

夜のほゆゆ寝いかへる程に緋金高橋の

目古さあはる草

舟砂のあか白き聲の中を朝のまつりの船動

き出づ

朝まのつねつゆも飯沼も暢い古昔の秋の散る

み

そのむかし稚児に出ひる六山威のつゝ局に代

りて人の天ひし

祭の舟中ける柱ゆてまゝ殊々趣段あんとも沼淵を

も所より行ひ難く、老のち年ふノ時代の土の夏祭

又の社拜もを御輿に抱ひしは真半昔の口をさる

し比こころおもひ起す

九月十七日記

の先考の舞殿のの波三十五年の九月十七日乃ち

三十二年前の日今月今日も三十三回忌を奉る

夫島の命まゝのそなの仕合せともうあへまか、二十

年長うとを奉るも暮るへ入らん、あんな昔昔が先考

氣あり、月の交りと叩く、折合ひ、亦引、その如きし
よと云、七、空、秋の向、見、可憐、菊、七、大、輪
の、供、花、の、小、野、菊、の、可、折、若、花、の、
老、壇、の、花、の、秋、氣、の、陶、汰、し、吹、流、去、の、
今、の、純、日、本、の、花、の、み、菜、肉、の、地、を、を、

自、分、の、花、疎、葉、を、心、み、疎、花、を、好、む、
西、味、の、異、を、所、に、在、り、歎、き、録、花、を、机、案、
に、置、く、と、中、と、す、而、し、疎、花、を、好、む、を、録、花、の、
法、と、し、畫、取、せ、し、る、花、を、多、く、自、分、の、又、必、と、
し、水、花、を、好、む、唯、此、紫、白、日、の、向、交、を、と、
ぬ、か、満、輝、の、紅、花、の、供、氣、を、失、ふ、難、し、白、花、
も、も、も、可、合、可、合、可、合、可、合、可、合、可、合、
牡丹、可、合、

清、楚、の、向、も、あ、り、紫、花、も、可、合、
菊、紫、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、
紫、花、の、如、き、秋、氣、の、如、き、淡、紅、の、花、を、
て、野、せ、の、よ、う、な、花、を、山、花、物、七、採、り、
し、枯、木、七、録、し、入、れ、し、
この、花、也、一、種、の、型、色、
曲、け、の、花、也、

〇、人、と、交、り、の、危、険、
ら、め、れ、の、語、の、如、神、の、宗、り、
が、交、り、の、形、状、
箱、を、味、味、
つ、も、花、も、互、ひ、

らいつとん七一種の接觸である。保し此の接觸は尤も疾
泊のよであるが淡泊である。深い交がある。心の交
り心と心の信託は終生解けぬものである。西洋の
握手や振吻をいひ、交りを表はす。この肉体の接
觸である。保し東洋の肉體の接觸は習俗
からい。他人の肉體の接觸はこと血淋淋とせんのである。
同性の七も、比から異性との別して許せん。保し
相余餘の外もある。思ひが母や保母の身體を委ねて
あつたの言ふを待たぬか、職業的の接觸を許せ
ぬしものよ、醫術や看護の按摩及び居るの三
人、髪梳、微兵検査等、税関吏とか、年々である。
此等の接觸は交りからい。貞節面志の通例人の身

體の接觸は診察するものだが、支那の貴婦人の身をも
醫術のよも身體の接觸を許さぬ。支那は裸體の女
人形のあつたの、醫術に患部を指示する為めのもの
がある。日本でも婦人の絶対の醫術の身體の接觸
を許さぬものがある。大隈元帥夫人をいひ、其の
實例がある。支那の男女席を異にするを礼とし、
異性の接觸はことを非礼の極とす。嫂がぬく、満ん
とする時、七も七を救ふ為り、手を取ること、
否か論議さす、やうな仕立がある。今の西洋の男然か
日本に移入して、男女相擁してダンスをやること、許
せん、海大浴場の男女の肉體のあつた部分を出して
ことが行ひ、アトリー、女子が赤裸でモデルとすの

扱よりつた。身体を露出すること、醜合手か觸んずると
目か觸んずるか、又此一種の極觸がある。花おとせんは
東洋の俗の異性離隔は従ひ出たとも云ひ得る。日本
のやうな回異性の交りか無つた或る時代、是れ決して
遠い昔でいらすが、其次第男女の極觸か、何と面倒か
あつたか、考つて見ても微笑を拂ふし得る。親類の
若い娘が家庭に扱ひて来ると、年々日語を交ること
とと遠慮しぬこともあつた。若い男女が打交つて歌かん
たりを聞かして、あつたやうに手と手が觸ん合ふのを無
上の喜びとして、時代もあつた。危険な事、男が手をせこ
かしてやぶり、痛める事、恥を感ずること、觸んやう男の
襟元が乱れを揺ると、あつたやうに、怒りも托も

軽く打つたり、燈籠の中、男女が足を交へたりやう
なことも、男と女と鼓するやうな出来事、この時代
代もあつた。思ふと滑稽な事もあるが、笑ひ誘ふ速
いやうで、近頃の男女の間柄は、互ひに法を交わすこ
と、躊躇する異性間、一旦吾氣相投するやう
な事、或は公式の儀、或は非公公式、千里の疎隔
か、卒然近接し、男女の身体、其の全部、他に委すま
る、心交ひ、肉交ひ、轉する、其間真に一變の
事、あつたやうに、肉交ひ、部分的か、全身
的か、宛か、思ひ、時母の抱擁、心に委したる物
か、若い男、若い女、全身を委して、偕む、穴の交り、佐
ぶの、不思議な現象があるが、交りの極致、恐らくこ

従容として銃殺された

六烈士の印象

當時の處刑責任者

シモーノフ老將軍

來朝して講演行脚



横川省三、沖城介、松尾、中山直隆、藤光三、田村一三の六烈士が露軍の銃口のもとに北滿の森と散つてからここに卅一年、時あたかも滿洲事變三周年記念を迎ふる折から、ハルビン陸軍特務機關岡田猛馬氏の發願により當時横川、沖南志士銃殺の責任者たるシモーノフ少將を日本に招聘して講演會開催の計畫をすゝめてゐた。このことを聞いた岡少將

は大いに喜び、自ら特務機關に日本行を命じたので來る九月下旬ハルビン出發、岡田特務機關の案内のもとに十月初東京を訪れることに決定した。シモーノフ將軍は日露戦争當時メチャク將軍の率ゐる四部隊隊軍付大尉として北滿の警備にあつてゐた兩勇士で、親しく兩志士銃殺の現場に立會ひ、神の如き態度に忘れ得ぬ感銘を植えつけられた人、ロシア革命後ハルビンに亡命して今は酒屋の門番をしながら氣の毒な生活を送つてゐる。

日本來朝とともに約一ヶ月間滞在し、志士の墓所と祖國ロシアの現状を日本國民に告ぐ」と題して全國にわたり講演行脚をして思惟國に激む日本國民に感銘を打ちなす計畫である(寫眞はシ將軍)



第一

此と感ずる。以来軍人が跋扈して動さずと四策を誤る。内の外相が軍人の言論に最も慎重を要する。〜のツイ先達を程のまじむ。此等時

日記
○昨廿日比岸より颯風相を命を付めて去来し凡

は、追々あきつて正午に急を告ぐ。カラス戸外
又鳴つて喧嘩。ハを銃。燈を點す。〜と、
大い報をまく。凡度二十ニノートンと、相のハノートン
が、勢く増進。〜。忽ち東京朝日の旗。〜
す。関西の東京。の大被官を執す。云く。凡の
六ノートン。十數の。〜。東海を渡
の汽車。織指。〜。天王寺の。重塔。微
塵と。うつ。山。園。達仁寺の。破。塔。車。海。各

後不慮、軍隊が動、昔年の二河境校舎の木柵とを
 取り壊し、或るの多きを、お経と曰社の才二部
 心出、被害の字、其間をぬき、休養え、とて、
 大改市内、浸み、古しく、民家の屋根、多く破壊し
 損害五倍、を認め、とらふ、死傷の数、未だ、
 不明、二千、或は二千、日とらふ、會大改市の、
 糧供給、不確、後、主す、軍隊、食、供、する、
 すと、東京の、風、害、い、と、し、
 玄關前の、二、樹、落、ん、た、り、の、み、
 大、火、と、ま、あ、か、り、
 九月廿二日



微塵となつた大阪四天王寺の五重の塔 (左手前は本堂) 本社機
 上より撮影 大毎電送
 この五重の塔は文化九年(約百年前)の再建で垂木を用ひ、これを變形の彫刻で代へ、中心の鈎柱に耐震的注意を十二分に拂つてあつた。壁方七米、
 高さ四十四米半、内部には釋迦如來畫像、四天王像が安置されてゐた。

○此頃のふふ現具かふふ
 とんと信問に空つて是のふ
 ハズんふの哉む返つたふ
 じ巻のふや章あふといろく
 あるが外部に彩とふておれ
 動物の手もや致もか活動
 くやうふふふふふ、何んか
 こうふつとふふ、此のギン
 の散の中は生きた蠅を捕へ
 て入んのひある、蠅うふふえ
 動力がある、

動力はHAIです
 假名で書けばハイです
 漢字で書けば蠅です
 飛んでる蠅を一すつかまへて入るのです
 五十四時間位は忠實に働きます
 死んだら又つかまへればよろしい
 いくら使用されても賃金はおりませんよ
 決して労働争議はおこりません
 其の点御安心下さい



○客足の多いバーや飯屋をふふ二人即問しぬれ杜
 丁が暮らんとあふ、こん道末のふふの果のルンペンか
 あらうか、あとお手に無駄話をしな、時ふふ歌ふ
 とを唄つて情面を陽気なふふのふあふ自れつりこ
 まんじ、飯合ふ酒を造しバーや飯屋の所得を多く
 するふふ、いくらく、錢を店から出つて、客も時ふふを纏
 頭をやつて酒を飲せしむるふふ、こんハキスグシと
 ぶふてあふ、客同士が喧嘩のふふせん、中ふふ入つて酒
 侍をやふ、無銭飲食の客や乱暴客をふふかあふん
 さんと片つけよ、此ふ味ふ糖をい用心様かあつて
 酔うゆの飲をふふ油法がふふておふふとふふ。
 ○十月節の波生に村務指ぬの者いれ、寺崎彦幸のふ

素等一行七日画家が日扇ふに合心しに公今七張り交
第人の肉を好しとある。唐書に自公と見えおのれ時何
かお慰めて揮毫するとそのあから、病室の床におけを
ちる菊池容海が十六羅漢が山中に居る(圓)こんの
三ノ所合け居の花梅の借鏡りも床に揚けてまはれ
この)も指しこし、こんを字して世をいれいと、其幅を交
けし。二日ばかり住て出来にまのや、今七家に在るが
筆力の容海もも唯他はあま、唐書に海石と努力
しにまはる此幅の外、**日**文珠の幅を画しに、まの
まつて今、まの。此等、まのと思ひ起すと、唐書と
交りのこん)まのむけんか、何んとまの唐書
と、酒杯の交りが毎、まの、十年、酒と

唐書

まの、まの、交りの確、まの大患、まの、まの。
自公が唐書と字を其都居にツパリ出し、九方、飲、廻、
つ、まの、唐書、村田丹波の姉も姉と、家をまの、まの
まの、まの、二階、画室、まの、まの、可
りの家、まの、まの、時例、まの、まの、容海、の床、の
隅から竹が織端をまの、まの、まの、壁かまの、破
れ、まの、まの、まの、まの、の、間、際、まの、侵、入、し、まの、まの、
まの、自公、まの、まの、まの、まの、画、家、の、床、まの、まの、まの、まの、
まの、まの、まの、まの、まの、自由、まの、まの、まの、まの、まの、
唐書、まの、まの、室、まの、揚、まの、まの、まの、まの、まの、まの、
金石、の、板、本、を、揚、まの、まの、まの、舟、匠、まの、まの、まの、自公、の
元、海、まの、まの、揚、まの、まの、まの、まの、まの、まの、まの、

を土産に物書しによるに。

亡友坂口五郎が自分の著る『鶏血石の長い命』を此の時、自分
ハ五郎(湖南(大友保)花六(渡村)も森波(深田)の三河屋
に祝飲し此時、唐書を席に臨み、鶴血石に因りて書し
ていづくんば、其幅は自分の花六とするもの、合心の
往友の皆故人と有り、此の幅に何れかあるか。此席
上自分の唐書に引れば、吾も画界の大友と傳へたるが定
めし唐物もあるとあり、唐書の著るも時々唐物
を元誤つて、えんせもその大敵をすることある。ツレ
も三幅物を持ちえんが来ればよかあるに、醉眼ひ奴辛よ
ろしいとよみれば、三十日七往つと書し、其書に
て来れば、今も又その唐心に、その書者も極むとせし

唐書

んく其物と心くし、其書に成るいと其か、少くぬ金
を投じて買ひこんばよも今更唐物と云んて、困
とよみの、自分七降巻しと、漸光の著る三幅書か、
此とよみの唐書、そのコナク、失敗あるとあり、
が斯く傷合ひに書いば、こも随つても多かつたの故。

唐書が自家の書集を出版の時、其時時代の代り、
多いうの困つてゐると、或る時、秋甲、恒春の、
其を知り合ひの理、唐書と云ふ、其書を
唐書が少年時代の著る、田宮内、其書、
の六画が、宮殿に入つて、揚げ、其書、
其書を、其書を、其書を、其書を、
其書の、其書の、其書の、其書の、

あり、手間の首端、枯木寒鴉を畫し、此れも亦あつた、今に紀念として架すの跡としてある。

房業は漸く物畫を修むことゝ志して、多く年を任すに、内々短しに、享年僅かに五十四才である。彼人の晩年、関口所の七との前、内野帝師の海地に遊び、その師志を、言人だが、随分教養の生活をやり、晩年の十数の中、枿をうらへば、ところか、まゝいふ、むづかしい、彼人の死、大正八年二月廿一日、彼人の一人、鳥谷惜山といふ、四郎、田舎の、交つてゐるが、いかに、房業よく、就中、評する、横人をも得る。惜山の、秋田人の、あつた。関口任か、房業、氣を、思ひ、出さ、と、漫ろ、記す、時、暇



和九年九月廿三日也

房業が、板下と、古い、現代、百人一首、と、ふ、本が、あつた、彼人の振、う、い、時代の、畫、だが、人物、百人が、はる、本人、と、う、似、て、あつた、或、い、字、を、い、で、お、顔、を、定、め、ら、れ、よ、う、の、筆、力、も、凡、び、あ、つた、近、以、坊、間、日、得、た、が、今、に、檢、査、が、面、倒、ひ、あ、つた、

房業の、畫、を、見、れば、房業の、横、技、に、滿、法、八、百、景、を、画、し、た、よ、う、か、只、の、用、の、以、て、在、紙、に、時、代、の、古、い、の、か、手、入、つ、た、と、う、あ、つ、た、お、れ、が、ま、う、く、墨、が、乗、り、ま、せ、ん、深、く、骨、が、折、れ、た、と、い、ふ、と、あ、つ、た、

○文、房、春秋、に、座、落、ん、と、保、つ、た、筆、記、が、日、夜、紙、十、日、部、に、載、せ、ら、れ、る、と、い、ふ、と、自、分、の、知、る、人、の、逆、子、の、内、に、年、寄、り、の、よ、も、あ、つ、た、極、癡、な、士、の、

一人の病と苦楽
 心を静かに
 静けしとある。ね
 美と芳原のぬく初
 耳のこもる

紅葉と吉原の老妓

登張 紅葉のお夏、お定の話をしませうか。江見君、お夏お定つて、あの話を聞いて居りますか。東京座で金色夜叉が演ぜられて居ります時に、俳優は高田實、藤澤淺次郎と云ふ連中……、其時に吉原の老妓お夏、お定と云ふのが、毎日芝居を見に来て居りました。所が段々芝居を見て居る中に、此二人が紅葉先生に會ひたいと言ひ出して、誰か紹介して呉れる人はなからうかと云ふので、其毎日東京座で二人を呼んでる人を

私が知つて居りましたから、私に頼んだらと云ふので、私から鏡花君に頼んで、さうして紅葉先生にそれを通じました。紅葉先生は其時病氣が重い時だが、會ふと云ふので、それで二人が會ひに行つたんです。所が會ひに行つて見ると云ふと、お定と云ふ人は、若い時に紅葉が吉原で遊んで居る時分に岡惚れしてゐたんださうです。やお前かと云ふやうなことで、大變御氣分がよかつた。暫く御話を承つて、短冊を書いて貰つて、寫眞を頂戴して歸つた。で歸ると後で、何か二人で先生に送つたと云ふので、紅葉先生は大變喜んださうです。それから手紙を例の麗筆で、幅の狭い巻紙へ禮狀を書いて二人へ送つて居ると云ふやうな關係から、紅葉先生が亡くなられてから、二人は其命日には必ず青山に參詣をする。時には奥さんと一緒に參詣をしてゐたんです。其翌年の霜月に法事をすると云ふことがありまして、吉原で法事をすると云ふので、私と泉鏡花と藤澤淺次郎が其法事によばれました。其法事と云ふのが餘程、なもので、御寫眞をかざつて、兎に角場が狭いのです。其狭い所に寫眞をかざつて、其他お共物、更のく、こ、和菓と云ふ

が長唄とか其他こつたもので、踊りを踊る。其老妓が踊つて、それが御法事のお仕舞でした。此事は鏡花の其當時の新聞小説に「仲町にて紅葉氏のこと」と云ふ題で詳しく書かれて居りますから、今日は鏡花君は居りませんから、今其大要を御話します。

長谷川 櫻痴居士が吉原で遊んで居る時に、

汁粉を封筒や色々なものに御馳走してやつて、それで今言へば刑事せうね、それに注意されたと云ふことを聞いて居りますね。ある時吉原でどうも汁粉の註文が非常



に澤山出る、これは怪しいといふので調べてみたら、福地が盛んに註文してゐることが分つたと事ふことを聞いたことがありません。酒はちつとも飲まなかつたらしいです。
 岡本 私も二三度お伴させられたことがありますが、ろくに話もせず、酒も飲まないんです。よくあれで遊んで居られると思ひましたね。
 江見 けれども談話は中々うまいですよ。
 長谷川 座談はうまいですよ。喋り出したら止め度もなく藝者なんか相手にしてやる。唯時時何の歌をやれと、試験をされるやうな風で、自分は黙つて聞いて居る。
 登張 櫻痴居士の話と言へば、一度氏を帝國文學會で大學に御招待して演説して貰つたことがあります。其時に開口一番、私は文と云ふものは多少存じて居りますが、文學と云ふものは嘗つて存じない」と云ふことから始まりました。さうして風呂敷からお出しになるのを見ますと、阿古屋の琴責の五行本をお出しになつて、今日は此阿古屋の琴責の講義をいたしたい。講義と云ふよりも、此琴責の判断を致したい、と申すのは、一體人の善惡邪道を音楽の方で裁判を

すると云ふことが、諸君古今東西此阿古屋の琴責の外にありませんかと云ふことからは、中々の長口舌です。殆ど全部を朗讀されました。此阿古屋の歌の朗讀が實にうまいので、皆惚れ／＼と聞き入つたものです。此阿古屋琴責の講義で一時間半ばかり續きました。其雄辯は今以て耳についり居ります。
 岡本 福地さんの阿古屋の琴責は十八番で……
 佐佐木 竹柏會の大會にも講演をお頼みしましたが實にうまかつたものです。日本橋クラブでしたが、遠慮して前の方があいてうしろの方に立つて居る人が大分あつたのです。すると開口一番、皆様もうすこしこちらへお進みなすつては如何です」といつて黙つて居られるんです。皆が前に進み終ると、皆様に態々近くまで進んでいたのでお聞かせするほど面白いことではないのです。凡そ難義なことは玄人の中に素人が手傳ひにくること、餅つきの手傳ひに料理人が庖丁を持つて来て何にもならぬやうに、今日歌よみの皆さんのあつまりに素人の私が來ましたのでは」とやうに實に上手でした。

當意即妙に出て來るんです。私は晩年に原稿を頼みに行つたら、病氣で寝て居られて、「床の中で失禮だけれども、當世の西洋文物を取入れて、一知半解の知識を以て辯論する奴があるのは怪しからぬ、そんな奴のものを買つてはならぬ。今の奴は、菊蕪にバタをつけて食ふ奴がある、そんな奴は話にならぬ」菊蕪にバタをつけるなんと云ふので到頭引下がつたことがあります。

長谷川 座談のうまいこと、さうして諷刺が

すると云ふことが、諸君古今東西此阿古屋の琴責の外にありませんかと云ふことからは、中々の長口舌です。殆ど全部を朗讀されました。此阿古屋の歌の朗讀が實にうまいので、皆惚れ／＼と聞き入つたものです。此阿古屋琴責の講義で一時間半ばかり續きました。其雄辯は今以て耳についり居ります。
 岡本 福地さんの阿古屋の琴責は十八番で……
 佐佐木 竹柏會の大會にも講演をお頼みしましたが實にうまかつたものです。日本橋クラブでしたが、遠慮して前の方があいてうしろの方に立つて居る人が大分あつたのです。すると開口一番、皆様もうすこしこちらへお進みなすつては如何です」といつて黙つて居られるんです。皆が前に進み終ると、皆様に態々近くまで進んでいたのでお聞かせするほど面白いことではないのです。凡そ難義なことは玄人の中に素人が手傳ひにくること、餅つきの手傳ひに料理人が庖丁を持つて来て何にもならぬやうに、今日歌よみの皆さんのあつまりに素人の私が來ましたのでは」とやうに實に上手でした。

相馬居士の個性
 人形法師、野と
 志士の中心に現
 代の徳業家と
 ちよ一筆角がある
 中々自分も就
 ての左の如く評

してゐる。

x

現代隨筆界一方の老雄と目されてゐる市島春城氏は、その著「小精蘆雜筆」の中で左の如く語つてゐる。

○隨筆は百貨店の如きもので、どんな項目でも書けないことはない。

○隨筆は玉屑の如きもので、屑ではあるが棄て難いものだ。

○簡単な書き方が隨筆の特色で、心掛けがあれば誰れにでも書ける。

これも一つの見方である。

いかにも春城氏のいつてゐるやうに隨筆は「心掛けさへあれば誰にでも書ける」文學である。但しその所謂「心掛け」が大變な事なのである。その所謂「心掛け」は常に何か書かうと心掛ける其の「心掛け」ではない。それは自然にその人の生活の奥底から湧き出る心掛けであらねばならぬ。

寧ろ私に云はせると、すぐれた隨筆は偶然に生れるものである。前にも云つたやうにそれは時に手紙の形で生れる。又時に日記の形で生れる。それは必ずしも計畫されて書かれたものには限らない。だから隨筆は誰にでも書けるといふよりも、誰でも書いてゐる文章の中に、おのづから見出されるものであるといつた方が一層適切であらう。随つてすぐれた隨筆は提供されるものであるといふよりは、発見されるものであるとも云へるであらう。

この意味から、特に隨筆家といふやうな名稱をつくることを私は好まない。隨筆は専門家のものではなくして、それは實に萬人のものたるべきだからである。

おそらく唯一人以外の者の目に觸れずに葬り去られた手紙なごにも、公にさるれば随分ご多くの人の心を動かす隨筆も少くないことであらう。だから、私は隨筆は必ずしも提供されるものご限らないで、むしろ発見されるべきものだご云つたのである。

市島春城氏の隨筆も、その文章の多くは、
多岐にわたるが、その多くは、
たゞの文藝的なものばかりで、
むしろ、
その多くは、
たゞの文藝的なものばかりで、
むしろ、

眞實を生かし、しかもその底に筆者の朗らかな心が鮮かに動いてゐる。前に引用した竹風氏の文章ご同じく、尾崎紅葉の思ひ出を語つた春城氏の一節に次の如きがある。

『私が紅葉君ご最初に知り會ひましたのは、讀賣新聞に私が主筆して居た時です。紅葉君は毎日でもありませんでしたが小説を書いて居られたので、時々社に見えて、それから交が初まつたのであります。一寸年を數へますご、今より四十年の昔であります。當時紅葉君は既に名聲の高い人でありました。初對面の感じを申しますご、色の淺黒い、背の高い、鬚のない、眼の鋭い、物の言ひ振りはきび／＼して、さう見ても生粹の江戸兒でした。先刻江見君が云はれたが、紅葉君は男に惚れられる男で無ければならぬごの自負もあつたやうだ。江見君も紅葉に惚れたご云はれたが、私も亦惚れた一人であつた。あの人は若い辭に親分肌の人であつた。全體あの人は帝大の法科に學んだ人でありましたが、法律の臭氣なご一點も無く、筆を揮へば彼れが如き婉麗の文を爲すのであります。ごごまでも男性的で、運動會で競走でもあれば一番早く走り出すのがあの人でした。』

これは紅葉山人の二十七回忌の筆記の一節であるが、無論春城氏自ら後に多少は筆を加へたものであらう。それにしてもかうした率直な話のうちに、如何に語られる人が躍動し、且語る人も躍動してゐるごごぞ。

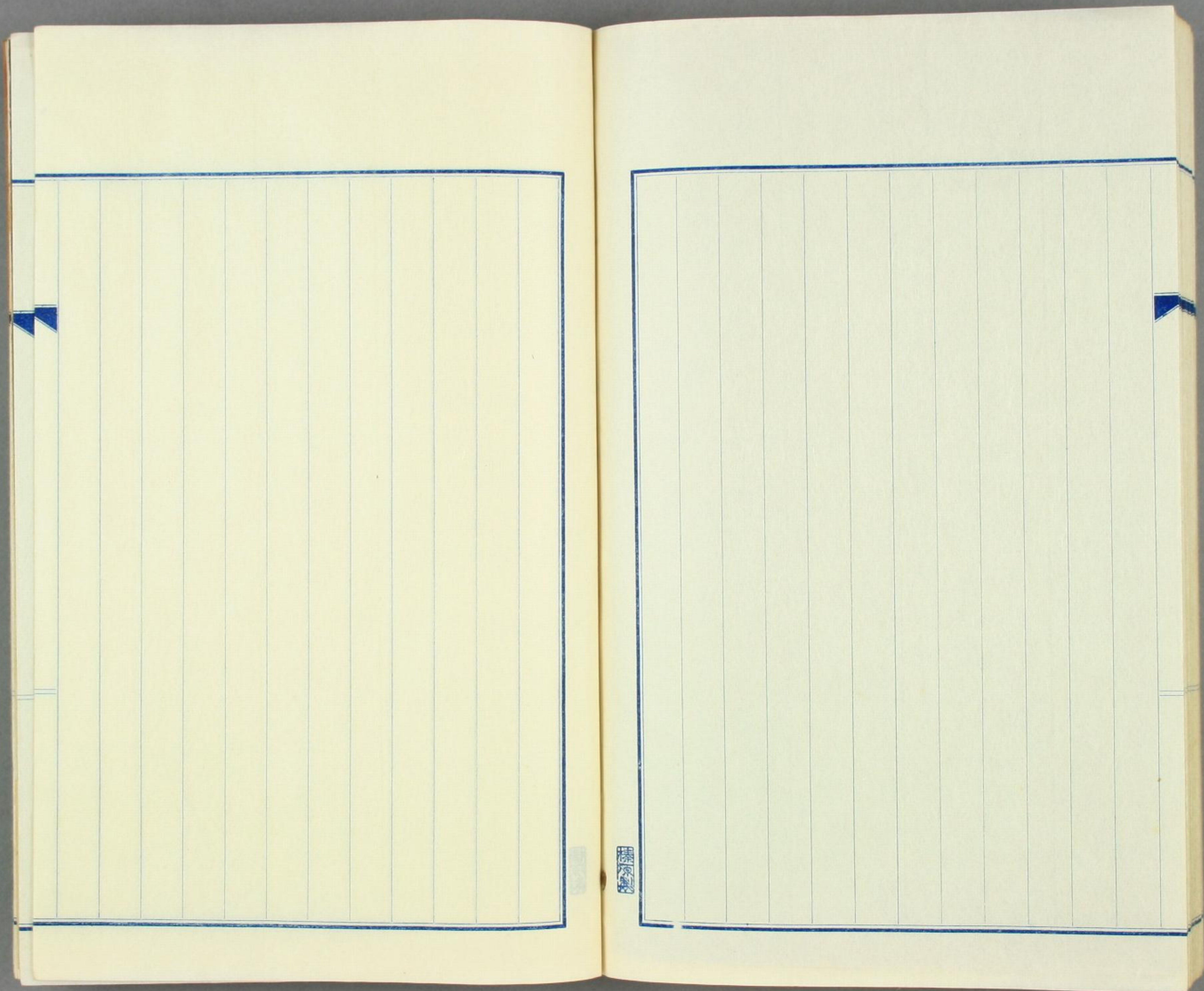
隨筆文學の妙處の一面はたしかにかうした率直さにある。

こんな風に僅に五六の人の書いたものについて見ただけでも、随筆が如何にその根柢に於ける筆者の心を、生活をいのかとしてゐるかよくわかるであらう。随筆はき端的に書いた人それ自らを現すものはなからう。あらゆるものが随筆の材料となる。随筆には型はない。勝手気儘に書けるところに随筆のたやすさがあると同時に、よき随筆を得る困難がある。誰でも書ける代りに、すぐれたものを得るここがむづかしい。随筆に専門家はない。随筆は萬人のものである。たとすぐれた随筆には、その根柢にすぐれた「人」の心がなくてはならぬ。(日本現代文章講座より)

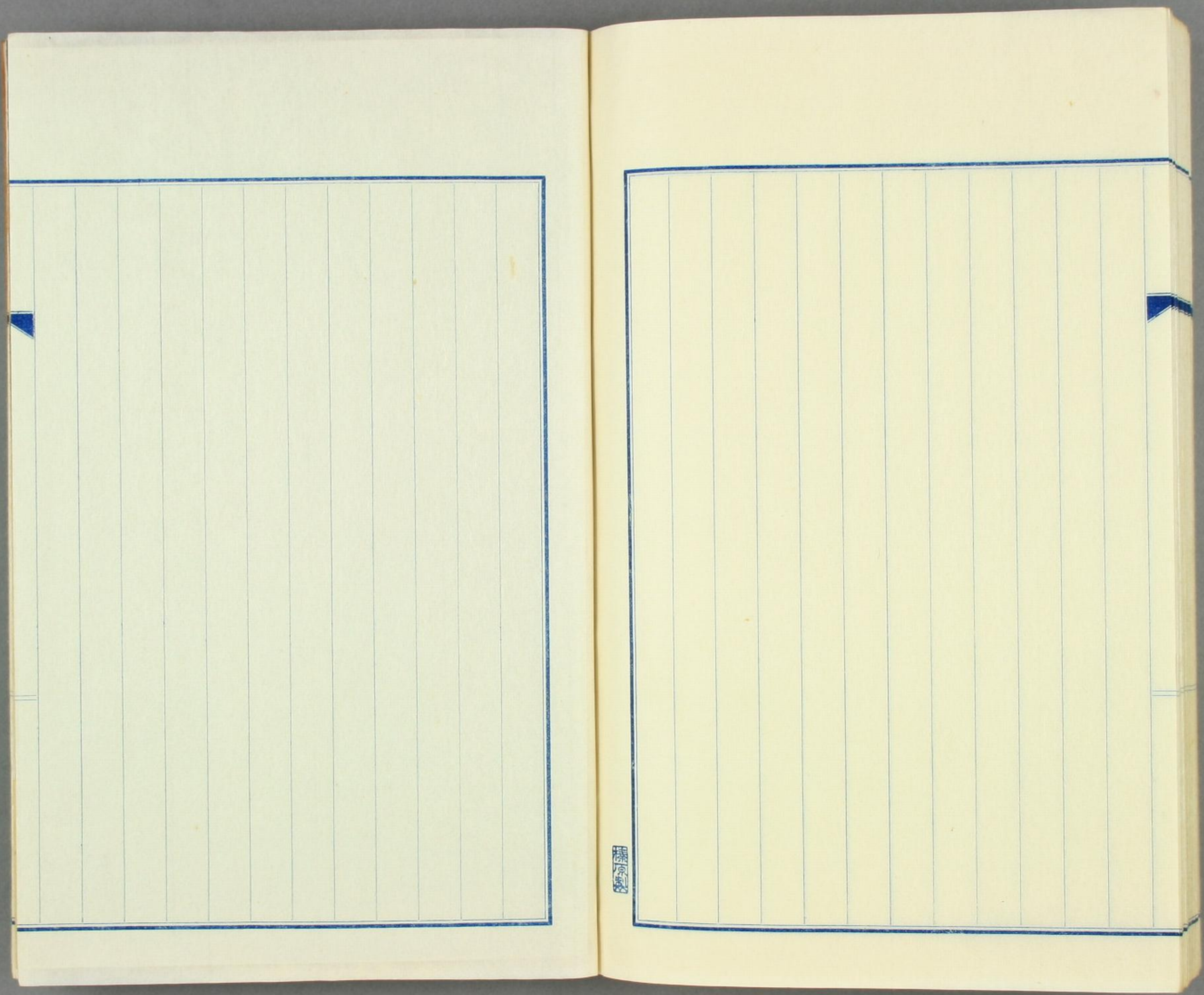
〇いつてや芭蕉に鐘聲を書いては詩句の鐘
 聞するよよ思ひ南より北が七人の向へ鐘と詠
 一はよを二書かあつ得んか。こゝに書きつひ
 の、鐘沈残月鳩鳥去夕陽村沈鐘の風致のあ
 りよは珠に晚鐘に風致がある。此句も晚鐘と詠
 してゐる。烟鐘源々月懸塔風雨送人送塔
 この六句は將夜中の鐘だが烟鐘の二字は如何

鐘聲

も趣がある。野梨天竺庵鐘聲山は鐘
 鐘の仰者ましのウアイブレーション山は動きを感じ
 するの、又景がある。鐘聲の詩の好材料がある
 が、東洋風味は洋人の解し得ないものがある。お味
 是書に、風後林の無一葉、山夕暮南寺暮天鐘
 一葉を留めよ。麻衣の林向、暮春鐘を送ること
 は秋の淋しさを一層あらわす。
 鐘聲の味は結構地、京都のあつたけのち、京
 都の冬空本山の石在地、巨鐘七名鐘、多い、その鐘聲
 の殷々として、またまがづこん、其心も細きま、凡が、
 鐘聲を弄するもの、此上のうの風味を、
 ちよ、自分の陰施、京都の、みれば、鐘のこゝろ、あつたけ、各寺



無名



1234

海事資料集めに

精魂を打込む

廻船式目「は學界の疑惑一掃」

國際汽船取締役 住田 正一氏

私の蒐集は中學時代からのこと、年譜入りの廻船式目といふ、今でいへば海法の発見されたことが學界に發表された。日本の法律はほとんどすべて支那の法律の影をうつし、漢文であるのに廻船式目は外國が平假名文であるばかりでなく内容も全く支那の影をうけてゐない。全文冊一ヶ條、世界で最も進歩してゐるドイツの海法に比べて見ても内容の上で少しも遜色がなく、海法の規定の如き取引の實際に即してゐる。却つて進歩してゐる。英海法の約百ヶ條、獨逸法の約八十ヶ條に比べると、廻船式目の條は約二百ヶ條に達してゐる。英、獨逸の海法もすべて廻船式目の條に對しては、條文の通りに「法を任ぐるの理あり」とも、理を任ぐるの法なし」とも、條文の條を強讀してゐる點、商賣の理を基礎としてゐる點、わが國固有の、まづ大阪の住田氏で一部発見



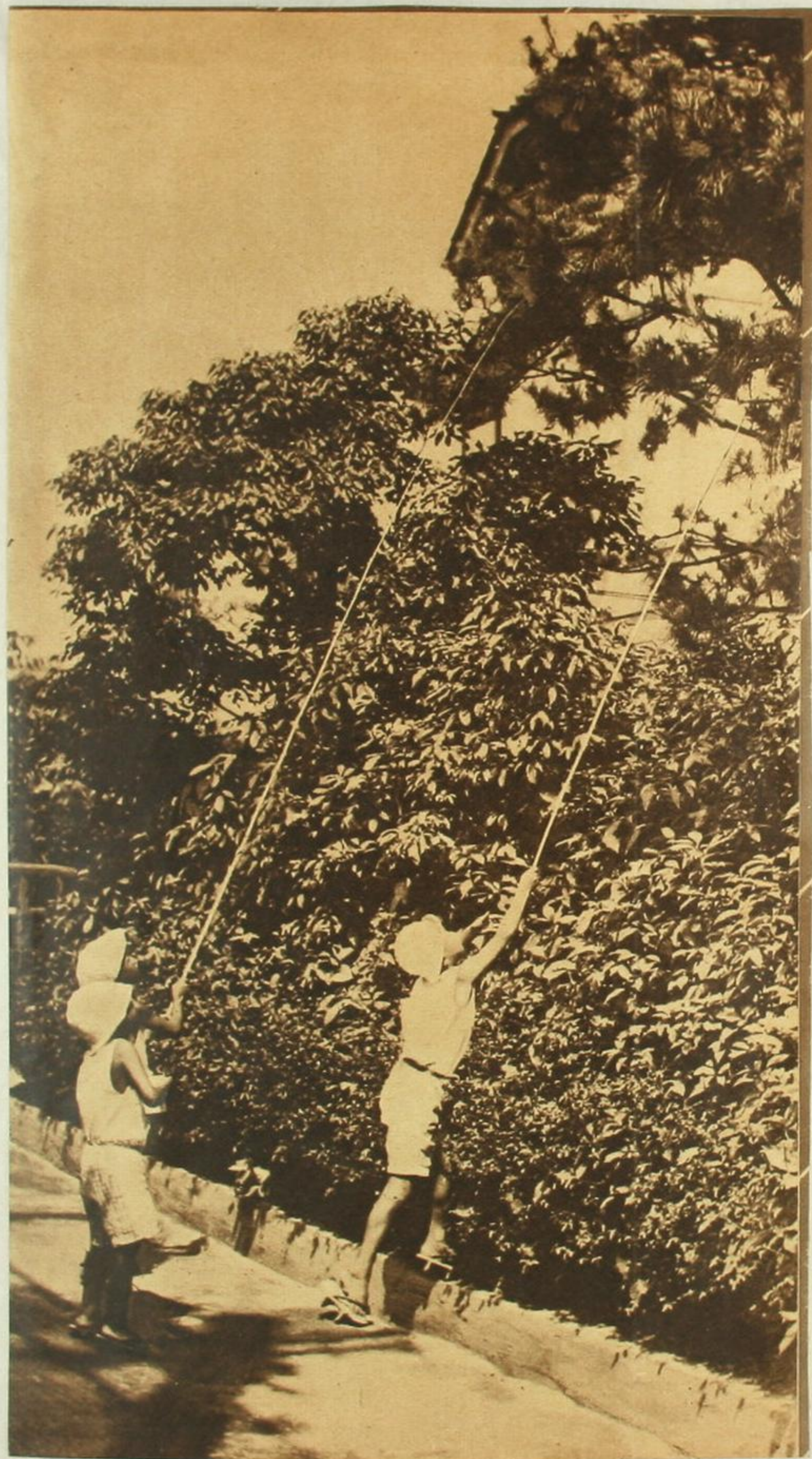
した。神戸來迎等でも発見した。神戸の紙屑屋で紙屑の中から発見した。津々浦々にあつた。現在までに蒐集した約百種、國別にすると廿ヶ國よく調べて見るとはじめ土佐の浦戸、薩摩の坊之津、兵庫三港の海運業の代表が集まり、鎌倉幕府の許しを得て編んだもので、徳川末期まで六百年間法的効力を保持してゐたことがはつきりわかつた。また内容を比較検討して見たところ、即ち三港の系統に分ち得ることもわかつた。私は近く歐文をもつて論文を記し、獨逸、英、諸國に紹介したいと思つてゐる。とである。

いものも多しもので中に文政十年版「和漢船政集」六十冊は由來よれなもので、これ十五年前には二部しかなく、現在でも五、六部のものであるが、私は同書を遺棄し各地に手を廻してゐると大正十四年名古屋の市に出たといふことを聞いた。急いで名古屋へ行つたが、一足進んで京都の細川が廿五圓で買つて行つたこと、直ちに細川を呼び、店先に坐り込んで談話すると二時間に及んだが、藤井繁太郎博士に頼まれて買つたのだからといつても、それらうとしない。なほもつとく頼んでゐると、テハ五百圓なら買ひませうと細川がいつたので私は「一、二買ひませう」と即座に答へ、細川も後へ引くことが出来なくなつて遂に私の有に歸した。細川はもとより買つたのは馬鹿者のやうにいはれたが、この頃では五百圓近くは價格で買ひ取られるやうになつた。文化十三年レザノフは日本の漂流民を伴つて長崎に來航し、海商を求めたがその時レザノフはオランダ語で航海記を書いてゐる。天文学者だつた高橋景保、青地林宗等の關係者が文政年間から幕末頃までかつてこれを九冊に邦譯した。書名は「星島航海地誌」一巻本を手

廣告

力を持つてゐたことがはつきりわかつた。また内容を比較検討して見たところ、即ち三港の系統に分ち得ることもわかつた。私は近く歐文をもつて論文を記し、獨逸、英、諸國に紹介したいと思つてゐる。とである。

昔、神戸内の大三島、野島等を本據としてゐた海賊の三島流、野島流など、稱へる。海賊は水軍の意味、海賊の流は海賊の意ではなく三島流の流は衆といつた意味である。かうした海賊流に關する古文書にはまた興味のあるものが多く、首領村上氏が南朝に歸してゐた關係から例へば「新田義貞は敵の軍艦をぬける時誰かされたが、堂々と應答した」とか、「楠木正成は忠義無比である」とか、南朝の忠臣に關する記述も多く見られ、海賊船は軍艦であると共に商船でもあつたので、双方の状態もよくわかる。スクリニウに關する記述が、発見されスクリニウの觀念の歐洲より早かつたことはすでに學界に紹介されてゐることであるが、かういふ文書の蒐集は興味が、かき集められないものである。殊に楠木はあへて水戸光圀をまつまでもなく當時から忠節を講はれてゐたといふことは真に快いことである。私は主として海國日本の海事資料を千五六百種蒐集し、海事協會に寄附して廣く利用してゐる。(寫眞は書齋の住田氏と廻船式目の一巻)



ピストルと佛教

◇廿七日の本紙(東京日日)所載宇野圓空氏の宗教講話を讀んで
想ひ起したものは、古い佛教雜誌「明教新誌」に掲載されたことのある
故犬養氏に關する逸話である。
◇それは國會開設當時のこと、犬養氏などが、新日本の憲政確
立に全力を傾倒してゐた頃である。以下明教新誌からの抜萃
「犬養毅、兩三友と共に前島密を訪ふ。談たまたま佛教に及
ぶ。毅曰く佛教の目的如何密曰く出離生死のみ。毅曰く出離生
死といへること、當世において何の用かある。密曰くこゝに人
あり、突然、ピストルを君の前額に擬し、君の一命を請はんと
迫る、事既に通るべからず、しかしてまたその理由を問ふに違
あらず、君如何かこれに答へんとするや。
◇毅曰く、二三十分間を借らざれば決答すること能はず。密曰
く、二三十分間の後果して如何、ソコで生死の大事は平生に決
定し置かざるべからず」と。
この時、語るもの、聽くもの、傳ふるもの、ともに何の心もな
かつた。いづくぞ知らん、四十余春秋のち、犬養氏は奇し
くもかゝる境地に直面したのである。
◇かれ、果してその利那に當年の問答を想起したかどうか。し
かも沈著從容、敵手をしてなほ讚歎哀惜せしめたその態度は、
かれの最後を飾るに足る堂々たるもの、いはゆるねりあげた宗
教的信念に悟入してゐた結果ではなからうか(會心居)
(東京日日新聞「三角點」より)

-(14)-

二八〇〇〇 千円	三八〇〇〇 千円	四九〇〇〇 千円	五〇七三〇 千円	四三二六六 千円
年元正大	年十正大	年元和昭	年五和昭	年六和昭

額費消地内人外



